
IS - インフィニット・ストラトス - 三種のISを操る者 アナザーエピソード

岩田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニット・ストラトス - 三種のISを操る者 ア
ナザーエピソード

【Nコード】

N3273X

【作者名】

岩田

【あらすじ】

姉は優秀だったが、妹の私は能力が低いために欠陥品と呼ばれ、それによって施設から追放された……。絶望の淵にいる私に一人の男性が私の前に現れ、こう言った……。『力が……。欲しいか？』と……。

IS - インフィニット・ストラトス - 三種のISを操る者の外伝ストーリーに当たる話です。IS学園での話はほとんどない、ほぼオリジナルストーリーですが、正伝からのキャラクターも時々出ま

す。

プロローグ

私の存在理由は・・・なんだろう・・・

ただ戦うために生み出された存在・・・それだけだろうか・・・

でも、事実はそれだけだった・・・

私の名前は・・・『ティファ・ボーデヴィツヒ』・・・以前の
名前は遺伝子強化試験体C-0038・・・私より前のC-00
37・・・『ラウラ・ボーデヴィツヒ』とは双子の姉妹として一緒
に生まれた・・・。

・・・しかし、実際のところ私たちに与えられる名前と言うのはただ
の判別番号みたいなものだ・・・特別な意味はない・・・ただの記
号・・・

それに・・・双子の姉妹と言うのは事実だが・・・人のぬくもりを
感じて生まれたのではなく、受精卵時の遺伝子をいじられて、鉄の
子宮から・・・私たちは生まれた・・・

双子ということもあり、私たちの姿は瓜二つというほどにそっくり

だった。

性格は一緒ではなかったが、それでも私たちは自身の目的のために訓練に励むのだった・・・

しかし・・・双子の私たちにある大きな違い・・・それは・・・
『性能』だった・・・

ある日のこと・・・

「お願いです！その判断だけはやめて下さい。彼女はまだ今後伸びますから・・・」

「・・・その君が言う今後伸びると言うのは聞き飽きたね・・・。そうやっていつまであの『欠陥品』を置くつもりなのかね？・・・こちらとしては人員維持だけでも大変なんだがねえ・・・」

とある施設の事務所では、教官らしき人物と施設の所長が話していた・・・。

「まだ彼女の力は今後大きく発達しますから・・・どうかチャンス・・・」

「だめだ・・・。そもそも、その欠陥品の姉は十分な能力を発揮しているのに、なぜ妹は全然能力を発揮しないのかね？双子だと言うのに・・・」

口論の内容は『ティファ・ボーデヴィツヒ』の今後どうするかについてだった……。ティファはどういうことが強化を施し多分の能力を発揮できないと言う欠点が出て、『欠陥品』といわれており、施設では問題になっている……

「だから何度も説明している通り、双子だから同じとは限らないんです。双子はクローンじゃないんですよ」

「……君が何と言おうが……。どの道あの『欠陥品』の処分はこちらで決めさせてもらう。……。まあ、結果は処分だろうがな」

と、所長らしき人物はタバコを吸って、煙を吐く。

「そ、それはあまりにも残酷すぎます！完全な結果が出ていないにも関わらず……！」

「……私こそ何度も言っているがね……。こちらも人員維持で精一杯なのだよ。欠陥品を匿うほどの余裕はないのだよ」

「くっ……」

「それに、どうしてそこまであの欠陥品に期待を込めているのかね？君の管轄部署にはこの施設最強の称号……。『レジェンド』を持つやつがいるじゃないか」

「そ、それは……」

「……もういい……。下がりました……。どの道結果を期待しても、処分の結果だろうな……」

「・・・・・・・・」

そして教官らしき人物は事務所を出た・・・

その後、私に通達されたのは・・・廃棄処分だった・・・。

つまり・・・この施設からの追放だった・・・。

私目隠しをされた状態で車に乗せられ、施設から遠く離れた場所で、私は車から降ろされた。

それから目隠しを取ると、目の前には荒れ果てた地面が一面に広がっていた・・・。

私はただ歩き続けた・・・。

何を求めているわけでもなく・・・ただ、歩いていた・・・。

しかし、時間が経つにつれ、身体の疲れはたまり、腹は減って、喉が渴いた・・・。しばらくして・・・私は地面に倒れた・・・。

私は・・・どうなるの・・・かな・・・

ティファは少し先のことを考える・・・。

あれから何も食べていないので、このまま倒れたままだったら、数日で餓死に至る・・・。

それ以前に脱水症状を起こし・・・そのまま水分が無くなって死に至るか・・・その二つが予想する今後だった・・・

姉さん・・・どうして・・・私たちって・・・こつも違うのかな・・・

ティファは乾ききった声で、ここから届くはずもない施設にいる姉に問いかけた。

人は違う・・・そういうものなんだね・・・双子だからって・・・同じなわけではない・・・

そして、涙を流す・・・

もし・・・私に・・・力があつたら・・・こんなことに・・・ならなかったのかな・・・

ティファは自分の無力さを憎むのだった・・・

力が・・・欲しい・・・。誰か・・・力を・・・

ティファは心の中でそう願い、目を閉じた・・・

なら、力を・・・貰うか・・・？

「・・・え・・・？」

ティファはゆつくりと顔を上げた。

前には、一人の男性がいた。

「・・・その願い・・・叶えてやるよ・・・」

「・・・・・・」

ティファはその言葉を聞くと、気を失った・・・

プロローグ（後書き）

IS・インフィニット・ストラトス・三種のISを操る者と同時に掲載していきますが、こちらもよろしくお願いします。

Story 1 出会い

「う、うう……」

ティファは気がついて目が覚めた……

「こ、ここは……?」

まず目に映ったのは、コンクリートの天井であった。

そしてティファは半身を起こして、辺りを見回す。

そこはとある一室で、色々と機材があった。

ティファが寝ているのはどうもベッドと言うよりはテーブルの上に布団を敷いたと言う感じであった。

「気がついたか」

と、声がしてティファは振り向いた。

そこには一人の男性がいた。

赤っぽい茶色の髪をして、ストレートにしてあった。左目に眼帯を

しており、顔立ちから二十代後半と思われる。服装は赤いコートと言っ
感じだが、どちらかといえば軍服と見える。

「あ、あなたは・・・？」

「・・・俺の名前は『ロイ・ラングレン』・・・影ながら活躍する科学者さ」

「・・・科学者・・・？」

「ああ・・・それで、君の名前は？」

「・・・『ティファ・ボーデヴィツヒ』・・・」

「ティファか・・・。いい名前だな」

「・・・名前と言っても・・・それはただの判別記号みたいなものです・・・」

「・・・そうか・・・」

「・・・私・・・どうなったのですか？」

「荒野のど真ん中で行き倒れているところに、俺が助けたよ。まあもし俺があそこに来なかったら、たぶん君は生きていなかっただろうな」

「・・・そう・・・ですか・・・」

「・・・特に問題はなさそうだな」

ロイはティファの状態から問題はなさそうと感じた。

「．．．ところで．．．。どうして．．私を．．？」

「．．．君は力が欲しいって言ったはずだが？」

「．．．あ．．」

ティファは思い出した様子．．

「あれ．．夢じゃ．．．なかつたんだ．．」

「．．．．それで、君はどうするんだ？」

「．．．．そ、それは．．．」

ティファは少し考えた。

「．．その力って．．．なんですか？」

「．．．．IS 『インフィニット・ストラトス』って、知っているか？」

「．．．．IS．．．？」

インフィニット・ストラトス．．．．通称『IS』

篠ノ之博士が開発したパワードスーツで、同時に最強の兵器として認識がされている。

どういうわけかは不明だが、ISは女性にしか反応せず、今の世の

中女性優遇社会になっている・・・。

「ISっていうのは女性にしか反応しないからな・・・。っていつでも、例外もあるけどな」

と、ロイの首に掛けられている二枚のメダルがチャリン、と鳴り響く。

「はぁ・・・」

「とりあえず、君はどうするんだ？」

「・・・その・・・ISを見せて・・・もらえますか・・・？」

「・・・そうだな・・・。百聞は一見に如かず・・・だな」

「・・・はい」

「・・・とりあえず、立てるか？」

「ええ・・・まあ」

と、ティファはベッドから下りて立ち上がる。

髪の色は銀色で、首のうなじまで伸ばしていた。瞳の色はルビーのように赤く、若干威圧感を放っていた。立ち上がると背丈はロイの胸のちよつと下ぐらいの高さで、服装はグレーのタンクトップを着て、ポケットがたくさん付いているブラウンのスポンを穿いていた。

「じゃあついてきてくれ」

「・・・はい」

そして二人は部屋を出た・・・。

「・・・あの・・・」

「ん？」

しばらくしてティファがロイに訊いてきた。

「・・・あなたはここに住んでいるのですか？」

「・・・そうだな・・・。今はここで隠れ住んでいるな」

「隠れ住む・・・？」

「俺はある組織に追われる身だからな・・・。だからあんまり長く住んでいるわけじゃない・・・。転々と移り住んでいるのがほとんどなんだ」

「・・・そうなんですか」

「・・・それより、呼ぶのなら『博士』って呼んでくれ」

「・・・はあ・・・」

そうして話していると、ようやくISがある部屋の前に着いた。

「着いたぞ」

そしてロイは扉の横のキーボードにパスワードを素早く打ち込み、そしてその隣にある静脈認証をして、扉のロックが解除された。

「この中に、ISがある」

そしてロイは扉を開いて、中に入って行き、ティファもその後をついていく。

部屋の中は機材がいつぱいあり、作りかけのパーツとかがたくさんあった。

ティファはその中を興味津々に見回していた。

「これが、そのISだ」

と、ロイは壁にあるライトのスイッチレバーを下ろすと、ライトがついた。

「これが・・・」

ティファの目の前には、一体のISがあつた。

全体のカラリングとしては、白がメインで、その次に多いのは黒で、各所に金があると、若干豪華な感じがする。形状から女性をイ

メージしたもので、腰にはスカートのように装備されているアーマーがあり、その先端にはのこぎりの歯のように並んでいる。両腕の下部には少し長いブレードが装備され、頭の上やボディー各所に刃物が装備されていた。

「コードネームは『フェイクライド』・・・俺が開発した第二世代型の試作ISだ」

「フェイクライド・・・」

「こいつは第二世代だが、性能は次世代のISに匹敵するぐらいある」

「・・・・・・・・」

ティファは興味津々でフェイクライドを眺めた。

「どうだ？」

「・・・是非・・・やらせて下さい！」

「・・・決まりだな・・・じゃあ早速そこに置いてあるISスーツに着替えてくれ」

「ISスーツ・・・？」

ティファはロイが指したほうを向いて机の上を見た。

机の上には衣類がたたまれて置かれてあった。

「ISを装着時はそれを着るのが好ましい使用例だ」

「なるほど・・・」

と、ティファはISスーツを手にとると、一旦置くと服を脱ぎ始めた。

「!？」

ロイはとっさに後ろを向いた。

「・・・・・・・・」

・・・気まずい・・・

「あの・・・着替え終わりました」

しばらくして、ティファは着替え終わった。

ISスーツはフェイクライドに合わせて白をメインとした黒のツートンカラーであった。

「そ、そうか・・・じゃあISの近くまで行ってくれ」

ロイは照れながらも、フェイクライドの制御コンピューターを起動させた。

ティファがフェイクライドの近くまで来ると、ISは各アーマーを

展開してしゃがみ、操縦者の受け入れ態勢を取った。

「・・・これが・・・IS・・・」

「最初は足から入れてくれ。その次に腕を入れてくれ」

「分かりました」

そうしてティファはフェイクライドの脚部アーマーに足を入れて、その次に両腕アーマーに腕を入れて、背中を預けた。

「じゃあ、まずは第一フィッティングを行う」

そして素早く手を動かしてキーボードを叩き、フィッティング作業に入った。

すると、フェイクライドのアーマーが閉じて、ティファの身体に装着していった。

そしてコードがフェイクライドの装甲に繋がり、システムを立ち上げていく。

「フィッティング終了まで少し時間が掛かるからな」

「・・・はい」

「・・・それと、平行してISの適正も見ておくか」

と、ロイはティファのIS適正を調べるためにシステムを起動させた。

「・・・君って・・・あの『施設』の者か？」

「え・・・？」

少ししてロイがティファに訊いてきた。

「どうなんだ？」

「・・・ええと・・・その・・・はい・・・そうです」

「そうか・・・」

「どうして・・・それを・・・？」

「・・・あの荒野に君みたいな女の子が独りでいるわけがないからさ」

「・・・」

「でも、何かあったのか？」

「・・・そ、それは・・・」

ティファはしばらく考えて・・・

「・・・あの施設から・・・追放されたんです・・・」

「…………なぜ、そんなことに……」

「……私は……遺伝子強化試験体として、生まれたんです」

「……遺伝子強化試験体……」

「私には……双子の姉がいました……。とてもそっくりな姉妹として……いました……」

「……姉さんがいたのか……」

「はい……。名前は……『ラウラ・ボーデヴィツヒ』……。いつも優秀な成績を残していました……。でも、私は違った……」

「……………」

「同じようにして作られた双子なのに、私はいつも駄目ばかりで、成績も凄く悪かったです……。だから……私は『欠陥品』と呼ばれました……』

「……欠陥品……」

「……それから、成績は向上せず……最終的に施設から追放されたんです……」

「……そうか……。そんなことがあったんだな……」

「……でも、そんな私でもある目標に向かうのならって思うと、勇気が沸いてくるんです」

「目標？」

「はい……。その施設では、最強の称号『レジェンド』っていうのがあるんです……。その称号を持った人がいまして、その人は施設のみんなからは憧れの存在でした」

「……そうか……。憧れの存在がいるのか……」

「……はい……。でも、私みたいな落ちこぼれには……。とうていなれっこないですよね……」

「……そうかな……」

「え……。？」

「最初っからなれないって決め付けても、それが結果論じゃないさ……。やってみないと分からないことだってあるものさ」

「……でも……私は……。全然駄目な……。人間です」

「……。いや……。君はその隠れた才能を発揮できなかっただけかもしれないな」

「え……。？」

ティファが疑問に思っている間に、ロイはティファのIS適正に驚く。

（……。適正が『S』とは……。すごいな……。）

IS適正で今のところ一番高いのは『S』だといわれ、現在では二人ほどしかないといわれている。

そうやっている、フィッティング作業が終わった。

「終わったか・・・」

ロイは素早く手を動かしてキーボードを叩き、フェイクライドに繋いでいるコードを外した。

「じゃあ早速、手を動かしてみてください」

「は、はい」

ティファは腕を上げると、手を動かす感じでやってみた。

すると、右手が閉じて、今度は左手が閉じてと、それを交互に繰り返した。

「うむ……。じゃあ次に歩いてみてください」

「はい」

そして、ティファは歩こうとするが、中々動かない。

「ISっていうのは体で動かすと言うよりは・・・イメージして動かすものだな……。歩くイメージを浮かべてみる」

「は、はい」

ティファは歩くイメージを浮かべると、フェイクライドの右足が前に出て、それから少しずつ歩き始めた。

「ほお……。うまいじゃないか……。初めてにしては上出来だ」

「そ、そうですか……。？」

「ああ。じゃあ次にPICを起動させてみる」

「ぴ、PIC……。？」

「……。簡単に言えば半重力装置だな……。とりあえず思い浮かべてみてくれ」

「……。はい」

そして、ティファが思い浮かべると、フェイクライドが浮かびだして、宙に浮いた。

そのまま辺りを浮かんだ移動して見せた。

（凄いな……。さすがに適正が『S』だとISとのシンクロ率も高い……。それに初めてPICを使用してもその力加減ができるのはな……。普通ならそのまま天井にぶつかるんだがな……。）

ちなみにこれは経験談だという……

そしてティファはISの動きを短時間でマスターしたようで、基本

動作をやりこなしていた。

「・・・今日はこれくらいでいいだろう・・・」

「は、はい・・・」

そしてティファはロイの元に行く。

「ところで・・・どうすれば外れますか・・・これ・・・？」

「いや、もうそれは君のものだ」

「え・・・？わ、私の・・・？」

「ああ。そいつは専用機だ・・・君だけのISだ」

「・・・私だけの・・・IS・・・」

「ISを収納する感じでイメージしてみろ」

「は、はい・・・」

そしてティファはそうイメージすると、フェイクライドは光を放ち、アーマーを収納した。

ISが消えたことで宙に浮いていたティファはそのまま落ちるも、着地した。

そしてフェイクライドの待機状態は腕輪となってティファの左の二の腕に付いた。

「専用機となったISはそうして待機状態になる。お前が呼び出せばいつでも出現するようになっていいるからな」

「・・・わ、わかりました・・・」

「それにしても・・・初めてにしては凄いいじゃないか・・・。ふつうなら基本動作だけでもすべて習得するのに三日ぐらいはかかるものだな」

「そ、そうですか・・・？」

「ああ。君の才能はここにあつたかもしれないな」

「・・・・・・」

「・・・これからも、よろしくな・・・」

「はい・・・博士」

そして二人は一旦研究室を出た・・・

S t o r y 1 出 会 い (後 書 き)

フェイクライドをどこで登場させようか迷っていたのですが・・・
外伝で登場させるようにしました・・・。

Story 2 別れ

それから数ヶ月過ぎた……

「はあああつ！」

広い室内でティファはフェイクライドを操って模擬戦を行っていた。両腕のブレードを展開して、目の前で動き回る仮想標的を切り裂いた。

すると後方に武器を持った仮想標的が現れ、攻撃してきた。

「くっ！」

ティファは床を蹴ってジャンプし、そのまま宙返りして仮想標的を飛び越えてその後ろに着地した。

「もらった！」

そして右のブレードを仮想標的の背中に突き刺して、撃破した。

その直後に背中のキャノンを前に展開して、残った標的を撃ち抜い

た。

『よし・・・今日はこれでいいだろう。戻ってきてくれ』

その様子をロイは上にあるモニタールームで見ていた。

「はい・・・博士」

ティファはISを解除すると、ロイの元に向かう・・・

「それにしても・・・もうISのすべての動きをマスターしたな」

「そ、そうでしょうか・・・？」

ロイとティファはISの研究室でISの調整をしていた。

「使い始めてすぐに武装の展開や使用をマスターし、それから一週間で模擬戦闘まで来るからな・・・。凄い発達だよ」

「・・・そうですか・・・」

「そうだよ・・・。こんなに凄いのを追放するとは・・・もったいないな・・・」

「・・・そうですね」

「それに、ISの稼働率も数週間でかなり高くなっているな・・・。そんでもってここ最近で50%まで上がっているな・・・」

「そんなに凄いのですか？」

「そりゃそうだよ。普通ここまで上がるのには相当な訓練を重ねないとならないんだよ・・・。最低でも一年以上はかかるはず」

「そう・・・なんですか・・・」

ティファは凄いことだがあんまり驚いた様子はなかった。

（やはり適正が高になると、発達の仕方も早い・・・いや、この子の場合異常だな）

そもそもIS適正と言うのは絶対値ではない。ISの動きは適正が高いといいのはそうだが、適正が低くても訓練を重ねることで適正S並みの動きになることもある。

しかし、ティファの場合、発達の仕方が尋常じゃないぐらい早い・・・。

（・・・俺でもまだそこまで稼働率は上がっていない・・・。この子はこっちのほうに向いていたんだな・・・。偶然って言うのは・・・本当に予期しないことばかりだな・・・）

ロイは今後のティファの成長に期待するのであった・・・。

ビッイイイイ・・・！

「！？」

すると、研究室の警報が鳴り響いた。

「な、何事ですか！？」

「待ってる！」

ロイはとっさにモニターを切り替える。

外のカメラに映っていたのは・・・

「くそっ！・・・もうあいつらが嗅ぎつけたのか！」

モニターにはここに接近中の歩兵隊が映っていた。

「それって、博士を追っている組織ですか？」

「ああ・・・。しかし・・・今回は早い」

ドオオオン・・・！

「！？」

すると、研究室に爆発音が響き、振動が伝わる。

「な、なんだ!?!」

ロイはとつさに原因を調べる。

「な、なに・・!?!もう侵入されていた!?!」

モニターには別の歩兵隊が侵入し、データバンクがある部屋に入っていた。

「くっ!・・・データを盗む気か!」

ロイはとつさにキーボードを一定のパターンに叩くと「データの消去を開始します」と表示された。

「一体何を・・?」

ティファはロイの元に寄る。

「データを消去する」

「そ、それじゃ・・・博士の・・」

「心配はない。バックアップはある」

と、キーボードを叩いて特定のパスワードを入力すると、横にあったディスクレコーダーからデータディスクが出てきた。

「よし!」

ロイはそれを全て抜き取り、ケースに入れた。

「……まずい……どうする……」

ロイは時間がない中苦渋の決断をする……

そしてキーボードでパスワードを入力すると、前に赤いボタンが出てきた。

「もつたないが……やつらにデータを盗まれるよりはましだ!」

そしてロイはそのボタンを叩き押した。

すると、モニターに赤くカウントダウンの表示が出てきた。

「博士……一体何を!?!」

「自爆装置を作動させた……。急いで逃げるぞ!」

と、ロイはティファの手を取ると、研究室の隅に走る。

「しかし……。もう逃げ場は……」

「いや、まだある」

「え……?」

すると、ロイはそのまま床を強く殴った。

その瞬間床のタイル一列が跳ね上がり、下に続く穴が出てきた。

「こ、これは・・・!？」

「掴まっている!」

「え・・・?・・・うわっ!？」

ロイはティファを抱きかかえると、その穴に入っていった。

そしてそのまま落ちていくと、その下にあるトロッコの中に落ちた。

「いでっ!？」

ロイはそのままトロッコの中に敷いてあったクッションに着地したが・・・

「うっ・・・もう少しふかふかのやつにしていればよかった・・・

」

痛みのあまりロイの顔は歪む。

「は、博士・・・」

「しっかり掴まっている!」

そしてロイはトロツコのレバーを前に押し倒して、トロツコはそのまま進んでいった。

しばらく進んでいくと、後ろから地震のような揺れが襲ってきた。

「くっ！」

それによってトロツコが揺れるが、脱線まではしなかった。

「・・・爆発したか・・・」

先ほどの自爆装置が作動して爆発したのだ。

「・・・・・・・・」

「行くぞ」

そうして、トロツコは止まってロイは降りると、ティファもその後続いた。

そして隠し通路を通って、地表に出た。

そこは研究所からかなり離れた丘の上だった。

「あーあ……。せっかく見つけた空き研究所だったのになあ……」

ロイは遠くで炎を上げる研究所を見た。

「苦労……。したんですね……。探すのに……」

「……。まあな……」

そしてロイはポケットから端末を取り出した。

「……。まずいな……」

端末を開きその内容を見てロイの表情は曇る。

「どうしたのですか？」

「……よりによって……量産型のISコアの設計図を奪われたみたいだな……」

「量産型の……コア？」

「ああ。ISのコアは束にしか作れない……。まあそれは普通の科学者のことだが、俺は違う……。まあ最初のコアを作るのに結構時間を有したからな……。そのコアを元にしていくつかの機能をオミットしてコストダウンした量産型のコアを完成させた」

「……。はあ……」

「それは設計図さえあれば誰にでも作れるものだ……。できれば

やつらに奪われなくなかったが・・・奪われてしまったな・・・」

そしてロイは端末をポケットに戻すと、丘の上の岩壁の近くまで行き、岩壁を叩き始めた。

「・・・何をしているのですか？」

「・・・静かに・・・」

と言われ、ティファはしばらく黙っていると・・・

「・・・ここだな」

数回叩いていると、さっきまでの岩を叩いている音とはまるで違う音がした。

「よいしょっと」

そして、ロイはその岩肌を持つと、そのまま外した。

「・・・へ？」

ティファは一瞬目を疑った。

そしてそのまま岩肌を模した壁を放り投げると、その壁で隠された空間に入る。

その中には、ジープ一台が入っていた。

「それは・・・？」

「万が一のための逃走用の車さ・・・」

と、ロイは車の表面についている砂埃を払うと、車に乗り込み、ティファもその後で乗り込んだ・・・

「これから・・・どうするのですか・・・博士・・・？」

ティファはしばらくして聞いてきた。

目の前には荒野が一面に広がっており、特に何も無い。

「・・・隠れ家に向かう・・・」

「隠れ家・・・？」

「ああ・・・」

「そこで何を・・・」

「・・・君を置いていく」

「え・・・？」

ティファは一瞬理解できなかったが・・・

「ど、どうしてですか!？」

「・・・これ以上・・・俺の事情に君を巻き込むわけには行かない・
」

「・・・そ、そんな・・・」

「・・・俺だつて・・・別れるのはつらいさ・・・。だが、俺の事情に
巻き込まれて命を落とすほうが・・・よっぽどつらい・・・」

「・・・・・・」

それからしばらく沈黙が続いた・・・

しばらくして、車は一軒の家に着いた。

ロイとティファは車から降りて、家の中に入った。

「・・・」

中は結構がらーんとしており、結構ぼろだった・・・

「・・・私・・・ここで・・・暮らすのですか・・・？」

「・・・まあ、一見ただけじゃその反応だろうな」

「・・・？」

「まあ、これを見れば一安心さ」

と、ロイは室内の左側の壁を叩くと、そこが開き、スイッチが出てきた。

そしてそれを押すと、隣の壁が開き、下に行く階段が出てきた。

「・・・これは・・・」

「ついて来い」

そしてロイは階段を下りていき、ティファもその後が続いた。

少し歩いて、真っ暗なところについた。

「一体・・・ここになにが・・・？」

「・・・こつこつことさ」

と、ロイは壁のレバーを下に下ろすと、ライトが一斉についた。

「うっ」

ティファは一瞬腕で目を覆った。

「・・・こ、これは・・・」

そして腕を退けると、そこには様々な機器があつた。

「地下にはISに関する機器を揃えているし、自家発電を行っているから電気も使用できる。ここに数十年分の食料を貯蔵しているから、食べるのには困らないだろう」

「・・・す、凄い・・・」

「それに衛星電波を受信できるから上にあるテレビが見れる・・・。俺がいなくても毎日ニュースを見ているよ」

「は、はい」

「それと、ISの訓練と身体を鍛えるのも毎日行ってくれ」

「・・・」

「それと、ISの機器はマニュアルを見れば、君ならすぐに理解できるから、ISの調整を怠らないように」

「・・・はい」

「衣類も一応取り揃えてあるから・・・基本何も困らないはずだ」

「・・・」

「・・・じゃあ・・・俺は行くぞ」

と、ロイは階段を上っていき、ティファは少しして上っていく。

「・・・本当に・・・行ってしまうのですか・・・？」

「・・・すまないな・・・。できれば君も連れて行きたかったんだが・・・。これ以上危険に巻き込むわけにはいかないからな」

ロイは車の前でティファに別れを言う。

「・・・まだ・・・博士に学びたいことが・・・あつたのに・・・」

「・・・そうか・・・。十分に教えることができなくて・・・すまないな・・・ティファ」

「・・・博士・・・」

すると、ティファの目じりに涙が浮かぶ。

「・・・泣くなよ・・・。俺だつて寂しいさ・・・」

ロイはティファを優しく抱くと髪を優しく撫でる。

「・・・博士・・・また・・・会えますか・・・？」

「・・・そうだな・・・いつかまた・・・会おうな・・・」

そしてロイはティファを離すと車に乗り込み、車を走らせた。

「・・・・・・・・」

ティファはその車を見えなくなるまで見届けた。

「・・・あ、ありがとう・・・ございます・・・博士・・・」

ティファは膝を着き、涙をこぼした・・・

そして・・・・・・・・時は過ぎていった・・・

S t o r y 2 別れ（後書き）

・・・次回で新しい展開になります。

Story 3 新しい出会い

そして・・・四年の歳月が経った・・・

「 それでは、次のニュースです。世界最強で知られるあのISを男性で初めて動かしたことが起きました・・・。女性にしか反応しないISとあって、この事態はとても重大なことだといいます・・・」

そのテレビに流れるそのニュースを・・・一人の女性が見ていた。

「・・・ふーん・・・。博士が言っていた例外って・・・こういうことなのね・・・」

その女性・・・ティファはコーヒーを一口飲む。

あれから四年の歳月が経ち、ティファはたくましく成長していた・・・。

四年前とは異なり、身長も伸び、身体はしっかりとしており、スタ

イルもよくなり、胸も結構大きくなっている……。銀色の髪はあれから切っていないので腰の位置まで伸びていた。服装はグレーのタンクトップに、ブラウンのズボンを穿いていた。

「……結構……。面白いことになりそうね……」

そう言って、ティファは席を立つと一部の壁を外してその下のスイッチを押して、となりの扉を開けた。

そしてそのまま中に入ってしまった……

ティファはISスーツの着替えると、訓練場に入る。

「……フェイクライド……。展開」

ティファはISを展開して、ISアーマーを纏う。

「……さてと……」

ティファはPICで浮いた状態で進み、壁にある武器庫に向かう。

「博士が残してくれた武器……。これで最後ね」

ティファはずらりと並んだ武器の中から、一つの武器を手を取った。

一見すればランスのように見えるが、刀身部はフェイクライドのブレードに酷似しており、その根元にはリボルバー式の弾倉があった。

「・・・仮想標的をISに設定・・・と」

ティファは相手の設定をすると、目の前に無人ISが現れた。

形状からして『鉄』クロガネと呼ばれる第一世代型の量産型ISであった。
操縦者がいる場所には機械が施されていた。

「さあ・・・いくわよ!」

そしてティファはランスを握り直すと、一気に無人ISに向かって行った。

鉄は左のサイドアーマーから日本刀型のブレードを抜き放つと、ティファに向かっていく。

そうして両者のブレードが交じり合った。

「うおおおおっ!」

ティファはそのまま鉄を押しいき、強引に押し返した。

鉄はすぐに体勢を立て直して再度ティファに向かっていく。

そしてブレードを振るうが、ティファはランスのブレードで受け止めた。

その直後に左腕のブレードを展開して鉄に切りつけた。

「でえいつ！」

そしてティファは鉄に蹴りを入れた。

その直後にランスの先端を鉄に向けると、柄に付いているトリガーを引く。

すると、ブレード根元の二つの穴からエネルギー弾が発射された。

そしてエネルギー弾は鉄に直撃した。

ティファはそのままランスを捨てると、両腕のブレードを展開した。

鉄は体勢を立て直そうとするが、もう遅かった。

「終わりだ・・・」

そして左腕のブレードで鉄の右腕を切り落とすと、そのまま右腕のブレードで鉄の胴体に突き刺した。

それから足で鉄を蹴り飛ばすと、背中のカヤノンを展開して鉄に向けて放った。

そしてエネルギー弾は鉄を撃ち抜いて、消滅した・・・

「・・・こんなものか・・・。手ごたえがないな・・・」

ティファはランスを拾い上げた。

「・・・もう少しレベルと相手を増やすか」

そうしてティファは訓練を続けた・・・

そんな時・・・

「うう・・・暑いな・・・」

荒野を暑そうに歩く一人の少年がいた。

アジア系の顔であり、十代中半くらいで髪は茶色で若干ツンツンとしている。右手首にはグレーの腕輪があった。

背中には結構大きなリュックをからい、地図を見ながら歩いていた。

「・・・うーん・・・この辺りだと思うんだがな・・・やっぱり俺の方向音痴のせいかな？」

少年はため息をついて、そのまま歩いていった・・・

「終わりだ！」

ティファはランスを振るうと鉄を切り裂いた。

そして鉄はそのまま消滅した。

「はぁ・・・さすがに大勢じゃ・・・結構来るわね・・・」

ティファは息を整えて、身体を真っ直ぐにした。

先ほどまで多数の鉄と模^{クロガネ}擬戦を行い、全て撃破した。

「ふう・・・」

ティファは一息つくとISを解除した。

「・・・しかし・・・結構汗を掻いたな・・・」

ティファの身体は汗でいっぱいだった。

「・・・でも、博士もせめてクーラーぐらい付けてもよかったのに・・・」

訓練場はクーラーなどの機器がないので、基本ここは暑いのだ。

「・・・シャワーでもいいけど・・・たまにはあそこでもいいかな・・・」

と、ティファは訓練場を後にした・・・

そして所変わって・・・小屋より少し離れた湖・・・

「・・・やっぱり・・・ここはいいわね・・・」

と、ティファは汗流しを兼ねて水浴びをしていた。

水に濡れた銀色の髪が太陽に光に反射して輝いていた。

「シャワーより・・・こうして水浴びをするのも悪くないわね・・・」

「

ティファは両手で水をすくって身体に浴びさせた。

そうしていると・・・

「・・・！！」

前の岩から物音がして、ティファはそれに気付くと、とつさに立ち上がると服の上に置いていた拳銃を手にしてその岩に向け数発発砲した。

「どわあああつ!？」

岩の向こうから悲鳴が聞こえた・・・

「誰だ!隠れてないで出てこい!」

すると、岩の向こうから手が出てきた。

「わ、分かった!・・・だ、だから・・・撃たないでくれ・・・!」

そして、オドオドして一人の少年が出てきた。

「そこで何をしている!」

ティファは拳銃を少年に向けた。

「ま、待ってくれよ!?・・・お、俺はただ道に迷っただけなんだ・・・。け、決して覗きをしていたんじゃないぞ・・・」

「・・・・・・・・」

ティファは更に少年に銃を向け、トリガーに指を当てた。

「・・・た、頼む・・・し、信じてくれよ・・・」

少年は結構震えていた・・・

「・・・・・・・・・・」

ティファはしばらく睨み付けた・・・。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そしてティファは拳銃を下ろすと、それを地面に置くと言っていた
タオルで身体を拭いて、服を着た。

「・・・・・・・・た、助かった・・・」

少年は安堵の息を漏らして地面に座り込む。

すると、ティファが近付いてきた。

「・・・・・・・・本当に・・・道に迷っただけなのか・・・？」

「あ、ああ・・・。そうだよ・・・」

少年はとっさに立ち上がると無実をアピールした。

「・・・・・・・・そう・・・」

そしてティファはしばらく考えて・・・

「・・・なら、うちに来る・・・？」

「え・・・？いいのか？」

「・・・あなたに銃を発砲したお詫びよ・・・」

「・・・じゃ、じゃあ・・・行くよ・・・」

「・・・ついてきて・・・」

ティファは小屋に歩いていき、少年もその後続いた・・・

「そのイスに座って待つて」

「あ、ああ・・・」

少年はイスに座ると、ティファはコップにお茶を入れた。

「・・・」

少年は小屋の中を見回した・・・

「・・・はい」

と、ティファがお茶を差し出した。

「あ．．．ありがとう．．．」

少年はお茶を受け取って、一口飲んだ。

「．．．な、なあ．．．え、ええと．．．」

「．．．ティファ．．．」

「え．．．？」

「ティファ・ボーデヴィツヒ．．．。私の名前よ」

「そ、そうか．．．」

「あなたは．．．？」

「お、俺．．．？」

「名前．．．あるでしょう？」

「あ、ああ．．．。名前は．．．『レオン・エスグランド』」

「．．．レオン．．．」

「．．．．改めて訊くけど．．．．君はここに住んでいるのか？」

「．．．．そうね．．．」

「なんでだ？こんな荒野のど真ん中で・・・」

「・・・私は・・・ある人を待っている・・・ずっと」

「待っている・・・？」

「・・・私の・・・命の恩人・・・」

「・・・そうか・・・」

「・・・それで・・・あなたはどうしてあんなところにいたの」

「・・・俺って・・・昔から結構な方向音痴なんだよ・・・。だから簡単に目的地に着けないんだよな・・・。だからあの時も迷っていたんだよな」

「・・・方向音痴ねえ・・・」

「・・・話戻すけど、俺は旅していたんだよ」

「・・・旅？」

「ああ。とある理由で旅をしているんだが・・・まあ今時旅ってしゃれているけど・・・まあ今の俺はそんな身なのさ」

「ふーん」

「・・・でも・・・君はいつまでもここでその人を待っているつもりなのか？」

「・・・そのつもりよ」

「・・・その人って・・・本当に戻るって言う保障はあるのか？」

「・・・博士は・・・嘘をつかない」

「・・・そうか・・・」

レオンは席を立った。

「・・・お茶をくれてありがとうな」

「・・・別にいいのよ・・・どちらかといえば・・・話し相手が欲しかった」

「・・・そうなんだ・・・。やっぱり話し相手はいないんだな」

「・・・こんなところに・・・人はあまり来ないからね・・・」

「そりゃそうだな・・・」

そうしてレオンはドアを開けて外に出ろうとした。

「・・・まあ、君がどう思つか分からないけど・・・一つ言っておくよ」

「・・・なに？」

「・・・もしその人とまた会いたいつて言うのなら・・・自分から会いに行ったらほうが会える確率が上がるんじゃないか？」

「自分から・・・」

「・・・まあ・・・どうするかは・・・君次第・・・かな・・・」

「・・・考えておくわ・・・」

「そうか・・・」

そうして、レオンは小屋から出た・・・

「あつ、それと・・・」

しかし、レオンはすぐに戻ってきた。

「まだあるの・・・？」

「・・・変なことを聞くかもしれないけど・・・また・・・会えるかな・・・？」

「・・・さあ・・・。・・・まあ会えたら・・・いいわね・・・」

「・・・会えたら・・・いいな」

そうして、レオンは外に出て行った・・・

「……………」

しばらくしてティファはイスに座った。

「……自分から……会いに行く、か……」

ティファは顎に手を置いて考える……

「……悪く……ないわね……。どちらかと言えば……私は行動するほうだから」

そうして、ティファはある決意をするのであった……

S t o r y 3 新しい出会い（後書き）

今回の話から原作の最初あたりと同じ時間帯になります。
ちなみに、外伝では正伝での話の裏側とかがあったりします。

Story 4 新たな旅立ち

それから二日経った……

「これで準備はいいわね……」

ティファは地下室でとある準備をしていた。

「フェイクライドの『空き容量』バスロットは結構あるから、博士が残してくれた武器全部をインストールできるからね……。どんな状況でも困らないようにしないとね」

そうして武器を全て入れ終わると……

「さてと……。これでよし、と」

そしてティファは別のところに行き、別の準備をした……

しばらくして、ティファは上で最終確認をしていた。

（食料と水はこれですばらくは持つ、と。ISスーツと着替えも入れて、一応現地のお金もよし……。これで準備はよし）

ティファは結構大きなリュックのふたを閉じると、背中にからい、壁に掛けていたゴーグルを首に掛けた。そして指先が開いた手袋をする。

そして、ティファは扉の鍵を閉めて、窓の扉も全て閉めた。

「さて、と」

全て閉め終えたティファは荒野に向く。

「……自分から会いに行けば会える可能性は上がる……か」

ティファふんと鼻で息をすると、荒野を歩き出した……

それからしばらく歩いていると……

「……道路」

ティファは一本の道路に出た。

（……これを辿っていけば……多分町に着く……はず）

そうしてティファは道路に沿って歩き出した……

しばらく歩いていると、ようやく一台目のトラックが走ってきた。

ティファは手を振ってトラックを止めた。

「このトラックってどこまで行くの？」

「この先ずっと前にある町までだ」

と、トラックの運転手が窓から顔を出していった。

「……ならその町まで乗せてもらえない？」

「別にいいが……次の朝までは着かないぞ？」

「構わないわ」

「……なら、荷台に乗れ」

「ありがとう」

そしてティファはトラックの荷台の壁に手を置いて軽やかにジャンプして乗り込んだ。

そうしてトラックは走り出して、ティファは首に掛けているゴーグルを着けてトラックの荷台の壁に持たれかけて、座った……

そうして・・・次の朝・・・

「・・・朝、か・・・」

ティファはゴーグルを外すと、朝日を見上げた。

「着いたぜ、お嬢ちゃん」

「・・・うん」

ティファは起き上がると、荷台を降りた。

「ありがとう」

ティファはお礼を言って、町に入って行く・・・

町・・・と言っても結構な田舎町で、建物にはボロボロな箇所が多かった。

（・・・ここで情報収集って言うても、こんな町じゃ博士を知ってい

る人なんていない、か)

・とりあえず何か情報を掴むためにティファは街中を歩いていった・

「・・・・・・・・」

しばらくしてティファは建物の壁に持たれかかり、地図を広げて見
ていた。

(・・・・ここから次の町までは結構あるみたいね・・・・ここに一
泊して、それから朝早くに出発して、途中で野宿して行けばここか
ら一日半ちよつとで着く・・・・かな)

そう考えていると・・・

「おい、女」

と、自分の事を呼ばれたのか、ティファは少し顔を上げて前を見た。
そこには数人の強面の男性がいた。

その中で中央にいるのは幹部なのか偉そうな感じであった。

「見ない顔だな・・・・。旅の者か」

「そうなるわね」

ティファは興味を無くして、再び地図に目を向ける。

「おい、この人を誰だと思っているんだあ？」

と、男Aが詰め寄ってきた。

「いくらよそ者だから知らないといってもな、この町に入ったらまず知っておかないといけない人なんだよ……」

「……ふーん……」

「なめとんのかオラッ！」

「よせ」

と、幹部らしき男が男Aを止める。

「……まあ知らないのなら仕方がないな……。だが、覚えておけ……。この俺……。テキサス様をな……」

「……覚えておくわ」

ティファは地図を畳むと、リュックを持ってその場を離れようとした。

「まあ待てよ、俺の家に来い……。部下が失礼したお詫びだ」

「……悪いけど……。興味ない」

そしてティファは歩き出そうとしたら・・・

「・・・待て・・・」

と、男Bがティファの肩に手を置いた。

「・・・!？」

その直後、ティファは男Bの手を掴むとそのまま背負い投げをした。

「て、てめえっ!」

そして男Cがティファに殴りかかってきた。

「・・・」

しかしティファはあわてた様子を見せず、軽く男Cの腕をかわして、そのまま男Cの足を払う。

「いでっ!？」

男Cが倒れた瞬間ティファは男Cの足を払った足をそのまま男Cの背中に叩き落とす。

「調子に乗るなあっ!」

と、男Aが拳銃を取り出した。

「・・・ここでもらえないかしら」

ティファは素早く動き、男Aの拳銃を蹴り上げた。

「なっ!?!」

そしてそのままかかと落としを男Aの左肩に落とした。

するとゴキツと鈍い音がして、男Aの悲鳴が響いた。

「・・・まだやるかしら?」

と、ティファは手をポキポキと鳴らし、落ちてくる拳銃をキャッチする。

「うつ・・・。お、覚えておけ!」

と、テキサスと名乗る幹部は逃げていき、遅れて部下三人も逃げた。

「やれやれ・・・。面倒ね・・・」

ティファは拳銃をズボンの間に差し込み、置いていたリュックをからうと、再び街中を歩き出した。

「あ・・・」

「・・・?」

歩こうとした瞬間、後ろから呼ばれた。

ティファは振り向くと、そこには一人の老人がいた。

「少しいいですかな・・・」

「・・・あなたは？」

「わしはこの町長でしてのう・・・」

「町長・・・？」

「つまり、この町はさっきの男たちで困っているってことですか？」

ティファはパンとハムとマスタードという簡素なサンドイッチを食べながら、町長の話を聞いていた。場所は街中のある喫茶店のテラスだ。

「ええ・・・。あやつらはこの町に来てはよく女に絡んでは、連れ去り、更には食料まで奪うと言うこまったものでしてねえ・・・」

「なるほど・・・。どうりでこの町には女性が少ない上、食料も少ない・・・か」

「ええ・・・。あなたに差し出したそのサンドイッチも残っておったものをかき集めて作ったものでしてねえ・・・」

「・・・・・・・・」

ティファは普通に食べていた自分に少し罪悪感を覚えた・・・。

「あ、いいですよ。お客さまに出すのは少しでもいいのでなければ失礼ですし・・・」

「・・・そうですか・・・。しかし、ここまでやるやつらに、なぜ市民は反抗しないのですか？」

「・・・テキサスと言う男は、この土地の領主でしてね。もし反抗などすればこの土地から追い出されるのです・・・」

「追い出される？」

「ええ・・・。ただでさえ住みにくいこの地方です・・・。ここを追い出されたら他に住むところなどありません」

「・・・・・・・・」

ティファはその『追い出される』という言葉に表情を曇らせる。

・・・自身も体験したトラウマだ・・・

「・・・それで、本題は何ですか？」

「・・・こちらの勝手なのですが・・・この町に留まってもらえませんか？」

「留まる？」

「勝手ながら申し訳ございません．．．しかしあなたの強さは先ほど見て分かりました．．．ですから、あの男の嫌がらせを退けるためにここにいてもらいたいです．．．」

「．．．残念ですが．．．私にはやるべきことがありますので」

「．．．そうですか．．．．それは残念です」

町長の表情は曇る。

「．．．ですが、私はここに一晚いますので．．．」

「そうですか．．．。でしたら私の宿でお泊まり下さい。あの男を追い出してくれたお礼です」

「．．．いいのですか？」

「ええもちろん．．．」

「．．．では、お願いします」

「わかりました．．．。それではここから歩いて最初の左側の角を曲がればすぐですので、お越しくださいます」

「．．．はい」

そうしてティファはリュックをからい、店を出た．．．

「……大変……だね……。やっぱり……」

ティファは考えながら、街中を歩いていると……

「……ん？」

すると、とある建物の下で人だかりができていた。

「……なんだろう？」

ティファはその人だかりに近付いていった……

「……ここはこれで、と……。よしできた！」

と、一人の少年……。レオンは工具を両手に持って立ち上がる。

目の前には小型のトラックがあり、エンジンを直していたようだ。

そして運転手がエンジンを掛けると、作動音と共にエンジンが始動した。

「おおすげえ！あのポンコツエンジンを直すなんて……。すごいな！」

「なあに……。このくらい朝飯前さ……」

と、レオンは指で鼻をこする。

「本当に助かったぜ・・・。少ないけどこれはお礼だ」

と、運転手は運転席から小袋を出して、中にお金を入れて、レオンに渡した。

「毎度あり！」

そしてトラックが行くのをレオンは手を振った。

「へへ・・・。これで少しは旅の足しにはなるぜ」

と、レオンは小袋の口を開けて中のお金を数えた。

「・・・あなたって・・・そう言う特技があるのね」

「え・・・？」

レオンは小銭を摘んだまま振り向くと、呆れた様子のティファの姿があった。

「・・・て、ティファ・・・？」

レオンは驚いて理解するのに時間が掛かってしまった。

「・・・お、驚いたな・・・。まさかこんなにすぐに再会できるなんて・・・」

「そうね・・・。しかし、なんであなたがここに？時間からしてここよりまだ先のところにいるはずよね・・・」

「は、ははは……。それが……。途中で道に迷ってさ……。着いたのが昨日の夜さ……」

「……。はあ……。方向音痴は相当なものね」

「ま、まあな……。それより、どうして君はここに？」

「……。あなたの言ったとおりにしてみただけよ」

「そ、そうか……。なら、君が会いたって言う博士にきくと会えるさ」

「……。そうね」

レオンは小袋の口を閉めると、ポケットの中に入れた。

「……。なに？」

ティファはレオンから見つめられるのが気になっていた。

「あ、い、いや……。なにもないよ」

「……。そう」

ティファはそれから歩き出した。

「君はこれからどうするんだ？」

「……。ここに一晚泊まるわ……。それからここから出る」

「・・・そうか・・・。また別れてしまっんだな・・・」

「・・・そうね」

「うつ・・・」

レオンはティファの素っ気無い態度に調子が狂う。

ドオオオオオン・・・！！

「！？」

すると、右から爆発音がして、ティファとレオンは振り向く。

「な、なんだ・・・！？っておい！」

ティファはとっさに爆発音がした方へと向かう。

「ま、待ってくれよ！」

レオンもその後続く。

そして・・・

「おまえらッ！この俺に逆らいとどうなるのか・・・思い知らせてやるぞ！」

と、部下の一人が手榴弾を投げ、建物の中に入ると大きな音と共に爆発した。

それはさっきの男たちであった。

どうやらさっきの仕返しに多数の部下を引き連れ、武装化してきたようだ。

「おい！さっきの女出て来い！出てこなければこの町を破壊するぞ！」

と、テキサスはメガホンで叫ぶ。

「・・・出てこない気が・・・ならば・・・」

と、テキサス部下より手榴弾を受け取ると、ピンを抜き、店に向け投げ放つ。

しかし、手榴弾は別方向から来た銃弾で軌道が大きくずれ、町の空き地に落ちて爆発した。

「・・・？」

そして、建物の陰から拳銃を持ったティファが出てきた。

「出てきたか・・・」

そしてテキサスは金ぴかのハンドガンを取り出すとティファに向ける。

「・・・無抵抗な町にそんなに大量な武装してくるなんて・・・最低ね」

「ほう・・・中々言うじゃねえか・・・だが、俺を怒らせたらどうなるのか・・・教えてやる・・・やれ・・・！」

そして、部下たちがライフルやマシンガンを構えてティファに向けた。

「・・・・・・」

しかしティファは顔色一つ変えなかった。

そして一斉に射撃が始まった。

「ハッハッハッハッ！！思い知ったか！この俺に逆らえばどうなるかなっ！」

テキサスは高らかに笑うと、手を挙げて銃撃をやめさせた。

「・・・どうだ・・・もう死体は・・・」

と言いかけた瞬間・・・

「・・・！？」

すると、砂煙が晴れると、そこにはティファが無傷で立っていた。

「ば、馬鹿な！？こいつ不死身か！？」

「・・・不死身ね・・・。そういうもんじゃないわね・・・」

と、ティファの右腕には・・・

「な、なんだ・・・あれ！？」

砂煙が完全に晴れると、ティファの右腕には局部展開した『フェイクライド』があり、そこからエネルギーシールドを展開して弾丸を全て弾いていた。

「ま、まさか・・・お前は・・・」

「そうね・・・。さて、どっちが馬鹿だと思う」

そしてティファはフェイクライドを完全に展開して、PICで宙に浮く。

「ISだ！？・・・まさか・・・そんな・・・！？」

テキサスが驚いている間もティファはゆっくりと近付く。

「・・・う、撃て！撃ちまくれ！」

と、叫ぶと部下たちは一斉に射撃を開始した。

しかし弾丸はISのシールドエネルギーで弾かれて、ダメージはない。

「・・・IS相手なら手加減なしでできるけど・・・今回は人間が相手だし・・・」

と、ティファは一気に飛び出した。

そして手加減して部下たちを腕でなぎ払う。

「はあああつ！」

そのまま回し蹴りをして部下たちを蹴散らしながら、左腕のブレードを展開して部下が持っているライフルやマシンガンを切り裂いていった。

「く、くそ！・・・まさかISでくるとは・・・こうなったら・・・」

テキサスはいつのまにか逃げしており、後ろで待機していたトレーラーに乗り込み、運転席に置いてあったスイッチを押した。

「くくく・・・。まだ使う気はなかったが・・・試しにはちょうどいい・・・」

そしてエンジンを始動させた。

「・・・・・・・・？」

しかし、キーを回してもエンジンは一向に動かない。

「なぜだ・・・？なぜ動かん！？」

と、一心不乱にキーを回していると・・・

「わりいな。エンジンと直結しているコードは切らせてもらったよ」

と、いつの間にかレオンが来ており、ドアを開けてテキサスに殴りかかる。

「ぐほっ！？」

思いっきり殴られてテキサスはのびてしまった・・・

「これで最後！」

そしてティファは最後に一人の腹を殴り、気絶させた。

「・・・ふう」

そして辺りを見回して、もう残っていないことを確認する。

「あっけないわね・・・」

そしてISを解除しようとした瞬間・・・

「……………」

すると正面から銃弾が飛んできて、ティファはとっさに回避した。

「敵……！」

そして前を見ると……

「……あれは……？」

そこには三体のロボットがあり、同じ形であった。

全体の色は茶色で、頭には赤く輝く一つ目があり、ずっしりとした形状であった。

中央の機体は右手にサブマシンガンを持ち、左腕にはシールドを持っていた。

左側、右側の機体は斧を持っており、中央と同じシールドを持っていた。

「……この反応……まさか……IS……？」

モニターには目の前の三機の反応はISと断定していた。

「……あんなやつらがISを持っているっていうのも変な話だけど……」

すると、中央のISがサブマシンガンでティファに向け放ってきた。

「今は考えている場合じゃない！」

ティファは右手に『バーストレールガン』を展開して、ISに向けて放つ。

しかしISは左腕のシールドで弾丸は弾いた。

「くっ！」

ティファは移動しながらレールガンを放つ。

しかしISはシールドで防いでいった。

「何て硬さなの……。でも動きはそれほど速くない」

ティファはそのまま砲撃し続け、三機にスキャンを掛ける。

「・・・あの三機・・・無人機？」

スキャンの結果は、三機のISには人が乗っていない。

「・・・無人型のIS・・・でもあんなやつらにそれが造れるわけがない・・・」

しかし、ティファはとあることに気がつく。

「・・・まさか・・・博士が言っていた組織に仕業・・・？」

目の前の機体はその組織が作り上げたIS・・・

「くっ！」

ティファはレールガンを収納して、両腕のブレードを展開して突撃する。

「はあああつ！」

そしてブレードを中央の無人ISに振るう。

しかしISはすぐに左腕のシールドを前に出してブレードを受け止める。

「くっ！硬い・・・」

その直後、右側から無人ISが接近して、斧を振り下ろした。

「・・・！」

ティファはとつさに相手のシールドを使って、後ろに下がり、回避した。

「このっ！」

その直後に背中のカannonを展開して、無人ISに向け放つ。

しかしカannonから放たれたエネルギー弾は斧を持ったほうの無人ISのシールドで防がれた。

「くっ！・・・あのシールドが厄介ね・・・」

そして再度無人ISに接近する。

すると斧を持った無人ISが前に出て、斧を振り上げる。

「そこだっ！」

ティファはそのままキャノンを放ち、無人ISの斧を弾き飛ばした。

「はああああっ！」

そして左腕のブレードを振り上げて、無人ISの右腕を切断した。

しかしその直後に後ろにいた無人ISの蹴りをくらい、後ろに飛ばされる。

「くっ！」

そして無人ISがマシンガンに向けた。

しかし、横から何かが投げられて、無人ISはそっちの方に気を取られた。

そして投げられたそれは大きな音と共に爆発した。

「・・・手榴弾？」

そして、建物の陰からレオンが出てきた。

「ティファ！助太刀するぜ！」

「な、何を馬鹿な事を！・・・あんたに何ができるって言うの・・・

「！」

しかし・・・

「心配はいらねえ・・・俺も同じ力を持っているからな」

「・・・え・・・？」

すると、レオンは右腕につけているグレーの腕輪を前に出す。

「来い！『ヴァイスハイト』！」

すると、その腕輪が光り出し、レオンは光に包まれた。

「これは・・・まさか！？」

そして、光が晴れると、そこにはISを身に纏ったレオンの姿があった。

全体のカラーリングはグレーがメインで、色は濃い部分と薄い部分とあり、形状は直線な面が多いもので、両肩のアーマーは左右非対称で、左肩にはシールドが搭載されていた。背中にはブースターパックがあり、その両サイドにキャノン二つを搭載していた。頭のデバイスはヘルメットに近く、後頭部にあたる部分には二本のアンテナがあり、目の部分には透明度の高いオレンジのバイザーがあった。

「よっしゃ！行くぜ！」

そしてレオンは背中 of キャノンを展開して、無人ISに向かってい

く。

「ツイン・ビームキャノン！」

そしてビームキャノンより放たれたエネルギー弾は右腕を失った無人ISのシールドに直撃して、そのまま打ち碎いた。

「・・・あのシールドを・・・一撃で・・・」

「ティファ！ボツとするなよ！」

「・・・！分かっている！」

そしてティファは一気に接近し、丸裸となった無人ISの胴体にブレードを突き刺した。

そのまま横に切り裂いて、無人ISを撃破した。

「もう一丁！」

レオンはキャノンを再度放ち、斧を持った無人ISのシールドを破壊する。

「いくぜっ！俺のとおきを見せてやるぜ！」

と、レオンは両手を叩きつけると、右手にエネルギーを纏わせる。

「鉄拳制裁・・・」

そこから地面を蹴ると、一気に無人ISの懐に入り込む。

「ビーム・ナツコオツ！」

そして右の拳を無人ISの胴体に叩きつけた。

「はああああ・・・」

すると、右腕が更に輝きだした。

「破っ！」

その瞬間右腕を通り、無人ISの胴体をエネルギーが貫通して、爆散した。

「素手で・・・なんてやつなの・・・」

「ティファ！後一体だぜ」

「・・・言われなくても！」

ティファは右手に『G・インパクトステーキ』を展開して、最後の一体に向かって行く。

サブマシンガンを持った無人ISはティファに向けサブマシンガンを放つ。

「おっと・・・俺もいるぜ！」

と、レオンは右手に中型のスナイパーライフルを展開して、無人ISに向け構えた。

「狙い撃つぜ！」

狙いを定めたレオンはスナイパーライフルを放った。

そして弾丸は無人ISのサブマシンガンを撃ち抜いた。

「くらえっ！」

そしてティファはG・インパクトステーキを無人ISの胸部に叩きつけた。

「撃ち抜く！」

そしてステーキを一気に全て叩きつけて、無尽ISは吹き飛ばされると、そのまま爆散した……

「よっしゃっ！」

レオンはガッツポーズを取る。

「……まさか……こんな近くに……いたものね……」

ティファはレオンをしばらく見た……

それから町のみんなからお礼の言葉を受けて、そのまま宿に泊まり、次の朝を迎えた・・・

「・・・さてと・・・」

ティファは出発の準備をして、宿を出た。

まだ朝早いので、少し薄暗かった。

それから歩いていると・・・

「ま、待ってくれ！ ティファ！」

「・・・？」

ティファは後ろに振り向くと、後ろから走ってくるレオンの姿があった。

「・・・レオン」

「はあ・・・はあ・・・ようやく見つけたよ・・・」

レオンは膝に手をついて、息を整えた。

「・・・今後は何の用？」

「お、俺・・・昨日の晩から考えていたんだが・・・決断したぜ」

と、レオンは息を整え終えて、まっすぐに立つ。

「ティファ……俺も君に旅について行っていていいか？」

「……私の……？」

「ああ……。俺を連れて行っても、損はないぜ」

「……悪いけど……私は一人のほうがいいの」

「いやいや、そんなにあっさり否定しないでくれよ」

「否定するわ。面倒なことは嫌いな」

「頼むよ……。このとおりだ！」

と、レオンは両手を合わせて頭を下げる。

「……どうしてそこまで言つの？」

「……まあ、ロマンチストに言うわけじゃないが……もし俺たちの出会いが運命だったら？」

「運命……？」

「ああ。あの荒野で俺とティファは偶然出会って、そこから別れて、そして今ここで再会した。俺たちには何かの縁があるんだよ」

「……それも随分ロマンチストっぽく聞こえるけど……」

「・・・ま、まあ・・・それは言ってる・・・かも・・・」

「偶然よ・・・」

「ぐ、偶然たつて、それにしてもあまりにもあれじゃないか？もし俺が方向音痴じゃなかったら、俺は次の街にまで行って、君とはこうして再会できなかった」

「自分が方向音痴だから、私との再会ができた、とでも言いたいのか？」

「いや、だから・・・この再会は何かあるんだよ。だから、頼む！」

「・・・・・・」

ティファはしばらく考える。

（・・・メカニツクの腕はいいとして・・・男性でありながらISが使える・・・少なくとも、使えなくはない、か・・・）

そしてティファはため息をつく。

「・・・せいぜい・・・私の足手まといには・・・ならないことね」

「え・・・？それって・・・」

「好きにすれば・・・」

「ほ、本当か!？」

「言っておくけど、あんたが私の足手まといになるのなら、私はすぐにでもあなたを捨てるからね・・・」

「お、おう！足手まといなんかとんでもないぜ。俺は役に立つぜ！」

「・・・そう」

ティファは呆れた様子だった。

「よしっ！俺達の旅の始まりだ！」

そして、レオンは意気揚々と歩き出した。

「・・・ちなみにいうと、次の目的地はこっちだから」

と、ティファはレオンが歩き出した方とは別のほうを指した。

「そ、そうか。ははは・・・」

レオンはテレながらティファの元へと駆ける。

「・・・はぁ・・・。先が思いやられる・・・。」

と、ティファは右手を額に当ててため息をつくのであった・・・。

S t o r y 4 新たな旅立ち（後書き）

ちなみにいうと、レオンはスパロボOGの『リユウセイ・ダテ』みたいなキャラクターとっててください。

Story 5 二人の間

「やっぱり乗り物があると、便利だよなあ！ティファ」

「そうね・・・」

と、レオンは後ろにいるティファに話しかけた。

二人は四輪バイクに乗って、荒野を駆けていた。

「・・・しかし・・・。廃材も同然なこのバイクを直してこうやって動かしているなんて・・・あなたって結構やるのね・・・」

二人が乗っている四輪バイクは荒野に放置されていたもので、それをレオンが修理したものである。

「だろ？大いに役に立つだろう」

「・・・どうやら・・・私はあなたを見くびっていたのね・・・」

「・・・本当に信用ないんだな・・・」

「・・・ところで・・・普通に運転して、町に入って捕まるんじゃないの？」

「その心配はない・・・。なんだって俺は特別免許を持っているんだ・・・。こういう系のバイクなら運転してもいいんだ」

「・・・ふーん・・・意外なものね・・・レオン」

「・・・だから・・・俺のことは『レオ』って呼んでくれよ」

「私はそういう仲になった覚えはない・・・」

「・・・ひでえ・・・」

レオンはぼやきながらバイクを運転した。

そしてしばらくして・・・

「おっ・・・見えたぜ・・・次の町だ」

前には次の町が見えていた。

「やっぱり乗り物だと早く着くな・・・」

と、アクセルを握ると・・・

ポフッ・・・！

「・・・あはははは・・・はあ・・・」

マフラーから黒い煙が出て、ゆっくりと四輪バイクは止まっていった・・・

「・・・やっぱり・・・ジャンクパーツじゃ・・・持たなかったか・・・」

「・・・はあ・・・で、どうする気なの」

「・・・町で新しいパーツを買わないと、これ以上の走行はできない・・・」

「・・・じゃあ・・・そこまで歩いていくしかないわね」

と、ティファはバイクから降りると、町に向かって歩いていく。

「はあ・・・手伝い無いですか・・・」

レオンはバイクのハンドルを持って、バイクを押していった・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・やっと着いた・・・」

それからしばらく歩いて、ようやく町に到着した。

「じゃあティファ。俺はパーツの買出しにいつてくるから、ティファはここで待ってくれよな」

「・・・できるなら・・・早くしてよね」

「はいはい・・・分かりましたよ・・・」

レオンは町を走っていった・・・

「・・・・・・・・」

ティファはバイクに座って、地図を見ていた。

（仮にバイクが修理できなかったら、今後の旅の修正が必要ね・・・
。そうなること）

と、考えていると・・・

「誰かつ！泥棒よ！」

すると、女性の叫び声がした。

声がした方を見れば、走って逃げる男を追う女性がいた。

男の脇には女性のものと思われる鞆が抱えられていた。

「ハッハッハ！ちよろいもんだぜ！」

と、男がティファの目の前を横切ろうとした瞬間・・・

「・・・おわっ!？」

ティファは座ったまま足を前にやると、男の足を引っ掛けた。

「・・・はた迷惑なことは・・・やめてもらいたいわね・・・」

そして足を上げて、そのまま男の首根っこに踵落としをした。

「げふっ!？」

そして男は気を失った・・・

「いやあ・・・結構新品同然なのが格安だったなんて・・・こりゃ儲けた!」

レオンは意気揚々として、修理パーツが入った袋を片手に走っていた。

「・・・って・・・あれ・・・？」

レオンはバイクの前で人だかりができているところを見た。

「・・・なんだ・・・？」

そして人だかりに近付いてみると・・・

「いやぁ．．ありがとうね．．お嬢さん．．。泥棒逮捕に協力して．．」

「当たり前のことをしてただけです．．」

「そうして、警察官が気を失った泥棒を引きずって、署に連行した．．」

「人だかりが解けていき、レオンはティファに近付く。」

「なァ．．ティファ．．。一体何があつたんだ．．？」

「．．泥棒逮捕．．見て分からないかしら？」

「．．．．そうですか．．」

「．．それで、パーツは買えたの？」

「もちろん。これがあればバイクは一時間弱で修理が終わる」

「．．．．そう．．」

「．．．．そっぴゃ．．．今日の宿はどうするんだ？」

「それならさつき決まっただわ」

「え．．．？どついつこと？」

「さつきの泥棒の被害者の女性が、宿の店主だったの．．。お礼に

今晚だけタダで泊めてもらえるようになった」

「そりやすげえ！これで一気に経費が浮いたな・・・あ、でも飯は自腹」

「それも無料で提供してくれるって・・・」

「まじかよ！とことんすげえや！」

と、喜びを隠せないレオンは飛び跳ねた。

そして夜になって・・・

ティファとレオンはその宿の一室にいた。

「へえ・・・意外と内装はしっかりとしているな・・・」

シンプルとはいえ、ボロボロではなくしっかりとした構造になっていた。

「しかもうまい飯が食えて・・・今日はついてるぜ！」

「・・・そうね・・・」

と、ティファは相変わらず素っ気無かった・・・

「・・・なあティファ・・・もう少しさあ・・・明るくしようぜ・・・」

「・・・」

ティファは赤い瞳の冷たい視線をレオンに向ける。

「・・・うつ・・・分かったよ・・・お前がそこまでなら・・・もう言わないよ・・・」

と、がっくりとレオンはうなだれた。

「・・・もう寝るわ・・・」

と、ティファはタンクトップを脱ぎ始めた。

「うわっ!？」

レオンはとつさに後ろを向く。

「て、ティファ・・・? な、なにを・・・?」

「・・・そのまま寝たら、寝汗で汚れるの・・・。ただでさせ替えが少ないから・・・汚したくないの・・・」

と、言いながらも、ズボンも脱いで、タンクトップと一緒に上に吊るしてある紐に干して、ベッドに寝転んだ。

「明日の朝までにはバイクを直しておいてね・・・」

と、ティファはそのまま眠りについた・

「お、おう・・・」

レオンは遅れて返事をした。

「・・・・・・・・」

レオンは視線をティファに向けないようにして、そのままベッドに寝転んで眠りについた・・・

「・・・・・・・・」

しばらくして、レオンは目を覚ました・・・。

と、言うよりは、眠れなかった・・・

「・・・・・・・・」

レオンはゆっくりとティファの方を見た。

静かに寝息を立ててティファは寝ており、こっちを向いて横に寝ていた。

それによってティファの少し豊満な胸の谷間がちらほらと見えていた。

「……………」

レオンはとつさに反対側のほうに向き直った。

（……………うう……………気になってしょうがない……………）

レオンはしばらく落ち着かず……………

（……………眠くないから……………この際にバイクの修理でもするか……………）

と、レオンはベッドから起き上がると、道具が入ったリュックを持って、外に出た……………

「……………」

しばらくして、ティファは目を覚ました。

「……………?」

ティファはレオンがいないことに気付いた。

「・・・あいつ・・・どこに行ったの・・・」

と、半身を起こすと・・・

「・・・・・・・・」

ティファは耳を澄ませて音を聞くと、かちやかちやと音が外からしていた。

「・・・外にいる・・・？」

ティファはベッドから起き上がると、干していた服を着て、外に出た・・・

宿の傍では、レオンがバイクの修理をしていた。

「・・・・・・・・」

レオンは真剣な表情で、バイクのエンジンのパーツ交換を行っていた。

「・・・よし・・・。次は」

と、今度はラジエーターの修理に取り掛かった。

「・・・起きるの早いのね・・・」

と、ティファが少しして来た。

「まあな……。出発は早いほうがいいだろう？」

「……まあ……そうだけど……」

「あと少しだ……。それまで待つてくれ」

と、レオンは作業に取り掛かった。

「……そういえば、聞いていなかったわね」

「なにを？」

少しして、ティファはレオンに聞いてきた。

「……レオンが持つそのIS……一体どこで手に入れたの？」

「……ああ……。これね……。貰ったんだ」

「誰に？」

「……俺も分からないんだ……。名前は教えてくれなかったんだ・
」

「……そう……」

ティファはしばらくして・・・

「・・・次に聞くけど・・・あなたはどんな旅をしていたの」

「・・・それが・・・」

「・・・どうなの・・・?」

「・・・正直なところ・・・本当に旅をしているってわけじゃないんだ・・・」

「・・・どういうこと?」

「・・・俺はさ・・・とある施設の出身なんだ」

「・・・」

すると、ティファの表情が曇る。

「俺はそこでメカニックマンとなるために訓練していたんだ」

「・・・そう・・・なの」

「・・・どうしたんだティファ?なんだか暗い・・・って、いつものことだけど・・・」

「余計なお世話よ・・・。・・・私も・・・その施設の出身よ」

「え!?!?そうなのか・・・?」

「・・・私は生まれる前の受精卵時に遺伝子をいじられて強化された試験体で、その施設で訓練に励んでいた」

「・・・そうだったのか・・・。でも、俺は君を見ていないけど・・・」

「・・・追放されたの・・・」

「え・・・？」

「・・・私は不要とされて、その施設から追放された・・・」

「つ、追放って・・・それじゃ・・・」

「・・・本当なら・・・四年前に私は死んでいたと思う・・・」

「・・・でも、どうして・・・」

「・・・その時に・・・私はあの人に出会った・・・」

「あの人？」

「・・・私の命の恩人で、私に力を与えてくれた・・・」

「そうなのか・・・」

「・・・あなたも・・・追放されたの？」

「・・・いや、・・・少し前に・・・その施設・・・潰れたんだ」

「え．．？」

「．．経営が苦しくなったり、色々と問題とかが生じて．．．少し前に潰れたんだ」

「．．そうなの．．」

「俺はそれから．．．ある人を探す旅に出たんだ」

「ある人？」

「．．．『フリーダ・エスグランド』．．．俺の姉さんだ」

「．．．姉さん．．．いたんだ」

「ああ．．．今も姉さんを探す旅でもあるんだ」

「．．．そう」

「．．．？どうしたんだ．．？」

「．．私にも．．双子の姉さんはいるの．．」

「そうなのか？」

「ええ．．．今はどこにいるのか分からないけど．．．いつかまた会いたい」

「そうか．．．俺も姉さんに会いたいんだ．．．ずっと会っていないからな」

「そう・・・あなたの姉さんってどんな人なの」

「・・・優しい人で、頭もよくて、身体能力も相当凄かった・・・俺の自慢の姉さんだった・・・けど・・・」

「けど？」

「・・・ある日に・・・行方不明になったんだ・・・」

「行方不明？」

「ああ・・・。当時一緒にいた人の話じゃ・・・事故にあったみたいなんだ・・・」

「事故に・・・」

「・・・でも、姉さんはまだ生きている」

「・・・確証もないのに・・・どうしてそう言えるの」

「・・・なんとなく・・・だよ」

そうして、レオンは修理を終えた。

「さてと・・・これで問題なく走行は可能だ」

「・・・話しながらでも・・・作業の手は止めないのね・・・」

「まあな・・・。俺は姉さんを見つけ出すまでは、諦めないぜ」

「・・・そういうところ・・・私と似ているわね・・・」

「・・・そうなのか？」

「ええ・・・。私は博士に会いたい・・・そして姉さんにも会いたい・・・だから前を見るの」

「そうか・・・。俺たちって似たもの同士だな」

「・・・勝手に決め付けないで」

そうしてティファは宿に戻った。

「・・・間が縮まってきたなあ・・・。あと少しって、ところかな・・・」

レオンは道具を戻すと、宿に戻っていく・・・

「・・・」

ティファはベッドに腰掛けると、手を顎に当てて考えた。

（似ている・・・私と・・・レオが・・・）

目的は確かに似て、根本的な性格も似ていた・・・

(・・・)

そして若干頬が赤らむ。

そして朝の九時が過ぎて、レオンはバイクのエンジンを始動させた。

「よし・・・快調だな・・・」

そしてティファが少しして荷物を持って来た。

「ティファ。いつでもいけるぜ」

「そう・・・」

なにやら少しティファの様子が変わった。

「・・・どうしたんだ？」

「・・・なんでもない・・・レオ」

「・・・え？」

レオンは一瞬理解できなかった。

「い、今・・・俺のことを・・・レオって・・・」

「・・・別に・・・呼んでもいいんでしょ」

「ま、まあ・・・そうだけど・・・」

レオンは意外なことに少し驚いていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そしてしばらく沈黙が続くと・・・

「そのトラックを止めて！」

と、女性の叫びがまたした。

そこでは、荷物を積んだトラックが走っていた。

運転席には昨日逮捕されたはずの男が乗っていた。

どうやら署から逃げ出したようだ。

「やれやれ・・・この町は騒々しいな」

「同意見だわ」

そして、二人は右手のみにISアーマーを局部集中展開した。

レオンの右手にはスナイパーライフルが握られ、ティファの右手には『バーストレールガン』が握られていた。

そしてトラックが二人を横切ろうとした瞬間、二人は同時に砲撃し、トラックの右のタイヤすべてを撃ち抜いた。

トラックはバランスを崩して、横転して地面を滑りながら止まった。
・
・

「次からは……ここには来たくないな」

「……そうね……。こういう時は……気が合つのね」

「……そうだな」

そして、二人は四輪バイクに乗り込んで、そのまま走り出して、町を出て行った……

S t o r y 5 二人の間（後書き）

・ ・ ・ 最近一言が少ない ・ ・ ・

Story 6 シュヴァレツェ・ハーゼ

それから走り続けて数日が経った……

「よっしゃ！……ついに来たぜ……ドイツ！」

レオンはバイクを止めると、高らかに声を上げた。

「ドイツねえ……」

ティファはいつもの通りであつた……

「何だよティファ。もう少しテンション上げていこうぜ！ドイツじゃまだトライアル中の第三世代型のISがあるんだぜ！くう……一度でもいいから見てみたいぜ！」

と、一人でテンションが上がっていた。

「……あんたって……機械オタク？」

何やら冷たい視線でティファは言っていた。

「な、なんだよその言い方・・・」

「・・・でも、軍事機密なそれを簡単に見られるわけがないでしょ」

「そりゃ・・・そうだけど・・・でもその関連施設を遠くから見ることできるさ」

「・・・捕まっても責任は取れないよ」

「大丈夫さ・・・簡単には捕まらないさ!」

と、レオンはバイクを一気に走り出して、荒野を駆けて行った・・・

そしてしばらく走っていると・・・

「なんだ・・・?」

レオンは遠くにあるものを見つけた。

「・・・何かの施設のような」

と、結構遠いのにティファは見えていたようだ。

「・・・結構目が良いんだな・・・」

「・・・私の正体は言っただでしょ」

「・・・そうだったな。じゃあ少し近付いてみるか」

と、レオンはその施設に向かって行った・・・

「・・・おお・・・凄いな・・・」

その施設に近付いてみると、そこは結構ガランとしていた。

「何かの研究所のようね」

「そうだな・・・でもなんの研究所だ？」

「私が知るわけがないでしょ」

「いや、それは分かっているけど・・・とりあえず近付いてみるか？」

「いや」

「・・・即答で否定するなよ」

そんなやり取りをしていると・・・

「……………」

するとティファは上を見上げた。

「どうしたんだ？」

「……………なにか……来る」

「え……？」

レオンはティファの視線の先を見た。

「……………なんだあれ？」

すると、上空に三つの影があった。

そしてその影は物凄いスピードでこっちに向かってきた。

「な、なんだっ！？」

その影は前の施設に向けビームを放った。

「攻撃されている！」

「レオ！」

「分かってる！」

レオンはとっさにバイクを走らせて、施設に向かった。

向かっている最中も三つの影は攻撃をしながら施設に近付いていた。

そしてレオンとティファは施設内に入り、中央付近で止まってそれを見た。

「・・・これは・・・」

施設中央には、三体のISがPICで浮いていた。

三体とも『全身装甲』であり、カラーリングは黒色系であり、細いアーマーがいくつかが繋がった感じに装着されており、頭部には赤い一つの目が光っていた。

「こいつらは・・・」

レオンはいつでもISを展開できるようにした。

「
」

しかし三体のISは役目を終えたかのように、レオンとティファを無視して上空に飛び上がり、そのまま遠くへと逃げていった。

「あいつら・・・この施設の破壊だけが目的だったのか・・・」

「レオ・・・今はそんなことはいい・・・とりあえずここの人達を」

「分かった」

そして二人は辺りに散らばり、生存者を探した……

「……これで全部だな」

そしてレオンとティファは生存者全員を中央に集めて手当てをした。

「……しかし……こんな派手にやっておいて死傷者がゼロって……」

「あくまでこの施設の破壊だけが目的だったようだな……」

と、辺りを見回していると……

「………なあ、ティファ……」

「なに？」

「……俺たちって……疑われるかな……」

「………さあね……」

と、二人の視線の先には、少数だがドイツの兵隊が来ており、その中には一体のISがいた……

「その二人……手を上げろ」

と、ISを身に纏った眼帯の女性が言ったので、ティファは後ろを向いたままで両手を上げて、レオンは正面を向いて両手を上げた。

「ここで何をしている」

「俺たちはただ・・・通りかかったただけなんだよ・・・それでここの人達を助けていたんだ」

「・・・民間人がここにいる時点で非常に怪しい・・・」

女性の警戒心は沈まなかった。

（簡単には信じてもらえないか・・・まあ、無理もないか・・・）

「その女・・・前を向け」

「・・・」

ティファはゆつくりと前に振り向いた。

「・・・!？」

すると、女性は驚いたように目を見開いた。

「ボーデヴィツヒ少佐・・・？」

そして女性は何度もティファを見た。

「・・・い、いや・・・似ているだけか・・・」

そして女性はIS・・・『シュヴァレツェア・ツヴァイク』を解除して、二人の元に寄った。

「・・・すまないが・・・事情聴取を受けてもらっぞ」

と、さつきより威圧感が無くなった気が・・・

「それで疑いが晴れるのなら・・・みたこと全て話します」

そして、レオンは少しおどおどした感じで言った。

「・・・しかしここでは話しにくいだろうから・・・一旦我々の基地に戻って話を聞こう・・・二人はそれでいいな」

「・・・はい」

「私もそれでいいです」

そうして、ティファとレオンは女性に連れられていった・・・

「これで全部です」

と、レオンは見たことすべてを女性に話した。

「ふむ・・・大体のことは分かった・・・」

と、女性は納得したようだ。

「紹介が遅れたな・・・。私はここ『シュヴァレツェ・ハーゼ』副隊長のクラリツサ・ハルフォーフ大尉だ」

と、女性・・・クラリツサは自己紹介した。

ショートヘアーの暗い青の髪をしており、左目には黒い眼帯をしているが、部隊内では全員黒い眼帯をしており、クラリツサは部隊内では年長だと思われる。

「副隊長ですか・・・」

「君は？」

「俺はレオン・エスグランドです。ある人を探して旅をしています」

「・・・人探しの旅か・・・。それで・・・君は？」

と、クラリツサはなぜかティファだと聞きづらそうにする。

「・・・ティファ・ボーデヴィツヒです・・・。レオと同じく人を探しています」

「・・・やはり・・・」

「・・・そういえば、なぜハルフォーフさんはティファの前だとなんだかおどおどしているのですか？」

「・・・とある人物にそっくりだからだ」

「とある人物？」

「・・・聞きますが・・・あなたに姉妹はいますか？」

「姉妹・・・ですか？・・・。・・・はい・・・双子の姉がいます」

「・・・その姉の名前はもしかして・・・ラウラ・ボーデヴィツヒではありませんか」

「・・・！姉さんは知っているのですか！？」

「ええ。ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐はこの『シュヴァレツェ・ハーゼ』の隊長です」

「・・・姉さんが・・・」

「だからあの時ティファを見て少佐って呟いたのか」

「ええ・・・。しかし双子の姉妹のなら顔が物凄く似ていてもおかしくはありませんね」

と、クラリツサは納得したようだ。

「姉さんは、今どこに・・・？」

「ボーデヴィツヒ少佐なら、ここから遠く離れた極東にある『IS学園』に行かれた」

「IS学園・・・？」

「あのIS学園にか・・・俺も一度行ってみてえな・・・」

と、レオンは少し興奮していた。

「・・・再度聞くが、あの時研究所を襲ったのは間違いなくISだったのだな？」

「はい。しかし全身に装甲があつて、全く見たことがないISでした」

「そうか・・・」

「それで、その研究所の職員は全員無事だったのですか？」

「心配はない。多少の怪我とかはあるが、命に別状はない」

「そうですか・・・よかった・・・」

と、レオンはホッと安堵の息を吐く。

「・・・しかし・・・一体なんの研究所だったのですか？」

「・・・最近の調査で分かったことだが・・・その研究所では極秘で『VTシステム』の研究が行われていたことが判明した」

「VTシステム？」

「知っているぜ。確かISと操縦者のシンクロ率を上げるための補助システムだが、あまりにも危険なためにアラスカ条約で開発はするか、研究も禁止されたシステムのことだよ」

「よく知っているな……。男子でそこまで知っているのなら尚更だが……」

「いやぁ・・・俺はメカニクマンですから・・・。こういうことはある程度知っていますよ」

「・・・まあいい。彼の言う通り、VTシステムはアラスカ条約で研究開発が禁止されている・・・。しかしそれが密かにボーデヴィツヒ少佐のIS『シュヴァレツェア・レーゲン』に搭載され、暴走を起こしたのです」

「暴走を・・・」

「幸い暴走は学園の専用機持ちによって止めることができたそうです」

「そうですか・・・」

「しかし、我々でも知らないはずの情報をなぜ他の誰かが知っていたのか・・・そこが問題だ」

「・・・そうですね・・・」

「・・・それに、その研究所ではつい最近事件が起こったばかりな

のだが・・・」

「そうなんですか？」

と、レオンが興味津々で聞いてきた。

「その研究所では私が使用するIS『シュヴァレツェア・ツヴァイク』とボーデヴィツヒ少佐が使用するIS『シュヴァレツェア・レーゲン』の姉妹機が作られた場所であって、そこでは両機のパターンを元にして製造された試作三号機が開発途中だったのです」

「試作三号機？」

「ええ。しかしその開発途中だった試作三号機は謎の組織によってコアごと奪取されてしまったのです」

「そりゃ・・・かなりの大損ですね」

「その通りだ。ただでさえISのコアは少ない・・・このドイツには僅か三基しか提供されていない」

「なるほど・・・今ではレーゲンとツヴァイクのみ、ということですか・・・。しかし試作三号機ってどういうものだったのですか？」

「それは答えることはできない・・・。国家機密に匹敵する極秘事項だからな」

「そうですね・・・。はあ・・・。」

と、レオンはがつくりと肩を下げた。

「しかし、その試作三号機はレーゲンとツヴァイクのデータを使って製造されていることだから、それらの系列に入っている機体だ」
「なるほど・・・いわばレーゲンは試作一号機で、ツヴァイクは試作二号機っていう立場で、それらのデータを用いて試作三号機が製造されたと言うことですか？」

「そうなるな」

「へえ・・・やっぱりISって色々と深いなあ・・・」

と、レオンは目を輝かせていた。

「・・・ところで、君たちもISを持っているのだろう」

「「え・・・？」」

二人は同時にきょんとした。

「民間人にしてはISのことを知りすぎているな・・・どうもISを持っているからそれくらいの知識があると言っ感じだな」

「ま、まさかな、なあティファ」

「・・・」

「・・・あれ？」

「簡単に見抜かれましたか……。確かに私たちは自身のISを持っています」

「そうか……」

「って、ティファ！？何を言ってるんだよ！」

レオンは慌てていた。

「安心はしろ。別に上層部やIS委員会に報告するつもりはない。ただ気になっただけだ」

「そ、そうですか……。しかしなぜ俺も持っていると思ったのですか？ISは女にしか使えないのですよ？」

「確かにそうだが、異例なことが起きたのなら、別に起きても不思議じゃない」

「……それって、織斑一夏のことですか？」

「そうだ……。そのような一例があったのなら、別に他にいても不思議ではない」

「……確かに……そうですね……」

「まあしかし、不思議なことがあったものだな」

「……どういふことですか？」

「その織斑一夏というのは、かつて我々を鍛えた織斑教官の弟だと

言うことだな」

「へえ……。不思議なことがあったものですね」

「ああ……。しかもつい最近、ボーデヴィッツ少佐から連絡が来た」

「姉さんから？」

「ああ。その内容と言うのが……。私も驚いたよ……。ボーデヴィッツ少佐に好きな人ができたということだからな」

「……。へ？姉さんが……？」

と、ティファは呆然とした。

「更に、織斑教官のほかに憧れの人物もできたと言うのがあったかな」

「憧れの人物？」

「ああ……。確か名前は……。レイ・ラングレン……。と言っていたかな」

「レイ・ラングレン？」

ティファとレオンは頭の上に『？』を浮かべて首をかしげる。

「どういう人物かはまだ聞いておりませんが、事実上ボーデヴィッツ少佐より相当強いお方なのでしょう……。それと、その人も男性だそうです」

「えっ！？まだいたのですか？ISを使える男子が・・・」

「そのようです」

「へえ・・・じゃあ今のところISが使える男子は三人か・・・と言っても公になっているのは二人だけ・・・か」

「・・・・・・・・」

そんな中、ティファは未だに悩んでいた。

「どうしたんだティファ？」

「・・・レイ・ラングレン・・・どうも引つかかる・・・」

「・・・俺もそう思っていたんだよな・・・どこかで聞いたような気がするんだ・・・」

「・・・・・・・・」

「まあ、今考えたって答えは出ないと思うぜ」

「・・・そうね」

「それでハルフォーフさん・・・事情聴取はこれで終わりですか？」

「ああ。君たちを疑ってすまなかったな」

「いえいえ。疑いが晴れてこちらも助かりました」

「そうか・・・。君たちの証言は今後の調査の役に立つだろう」

「そうでありたいですね」

「それと、私と話したことはもちろん他言無用だ」

「分かりました・・・。俺はこう見えても口は堅いほうですから」

「そうか・・・。では、君たちとまた会える日を待っていることとしよう」

「はい！俺たちもまた会える日を楽しみにしています」

「・・・私も・・・楽しみにしています」

「・・・では、途中まで見送ろう」

と、三人は立ち上がると、部屋を出た・・・

「いやあ・・・見送りな上、お礼にこんなものまで貰ってありがとうございますね」

と、レオンとティファは四輪バイクから、新たに提供された軍用ジ

ープに乗っていた。

後ろの二台には二人が乗ってきた四輪バイクと、予備のガソリンが入ったポリタンクが三つ載せられており、そこに二人の荷物を置いていた。

「なあに、疑った時の謝罪や情報提供をしてくれたお礼でもある」

三人は軍事施設の出口におり、クラリツサー一人で見送りに来ていた。

「・・・では、またどこか会いましょう・・・ハルフォーフさん」

「そうだな・・・それとティファ」

「何でしょうか？」

「・・・ボーデヴィツヒ少佐に・・・会えるといいな」

「・・・はい」

「それと、君たちの次の目的地だが、ここから東を進んでいけば、一日半で着くはずだ」

「そうですか・・・。ありがとうございます」

そして、レオンはアクセルを踏み、ジープで荒野を駆けていった・・・

クラリツサはその姿が見えなくなるまで手を振った・・・

S t o r y 6 シュヴァレツェ・ハーゼ（後書き）

研究所を襲ったISのイメージとしては、原作や漫画の『ゴレム？』がモデルです。

Story 物凄い女剣士

「はあああ……暑い……」

と、森道のど真ん中でジープを止めて、レオンは団扇うちわで扇いだ。

なぜこうなったかという……

「全く……調子に乗りすぎよ……。ラジエーターだけで冷却ができないほどに走らせる馬鹿がどこにいるの」

「うつ……」

レオンはジープが手に入ったことで気持ち弾み、派手に走らせた結果、オーバーヒートを起こした上、ラジエーターだけでは冷却ができないので、今は自然冷却中……

「どうするの」

「……とりあえず、日陰に入れようぜ……。そうすれば少しは冷却時間が短縮できる……」

そして、レオンは一人でジープを押して、ティファは腕を組んで助手席に座っていた。

「なんでお前は手伝わないんだよ！」

「あんたの責任でしょ」

「うつ・・・」

レオンは言い返せなかった・・・

（うつ・・・相変わらず冷たすぎる・・・）

心の中で愚痴りながらも、ジープを押していった・・・。

「はあ・・・はあ・・・ようやく着いた・・・」

しばらく押して森林の日陰にジープを入れた。

レオンはジープのタイヤにもたれかかって座った。

「・・・」

と、レオンが団扇で扇いでいると・・・

「・・・レオ」

「なんだ？」

「いつでもISを展開できるようにして」

「？なんでだ？」

「いいから」

と、ティファはジープから降りると、辺りを見回す。

「……………」

森林が生い茂る辺りでは、なにかが動いて木々の音がした。

「……………！」

すると、ティファの後ろから何かが飛び出てきた。

「ティファ！」

レオンはとっさにISアーマーを展開して、襲撃者に飛び込んだ。

そしてそのままタックルをして襲撃者を跳ね除けた。

「大丈夫か？」

「…………あれくらい……私は気付いていたわ」

と、ティファはISアーマーを展開して、右手に『バーストレールガン』を展開した。

「ひでえ・・・助けたのに・・・」

そう愚痴りながらも、レオンはスナイパーライフルを展開した。

そして、襲撃者は体勢を立て直して、レオンたちに向き直る。

「こいつは・・・」

その襲撃者は異様な姿であった。

全体暗いグレーのカラーで、『全身装甲』で、細長い頭をして、口元にはチューブのようなものがあり、バイザーのカメラアイの上には、更に赤い二つのカメラアイがあり、胴体は長めで、肋骨のようなモールドが入っており、両腕には四本の爪があり、その中央に銃口が見られた。足は逆関節であると、従来のISとはかけ離れた姿であった。

「こいつも無人機ね・・・。こいつの中に生体反応がない」

「そうか・・・。なら、手加減無しで攻撃ができるな」

と、レオンはスナイパーライフルを放った。

その襲撃者は見かけによらず素早い動きで避けた。

その直後にティファがレールガンを放つも、襲撃者は素早く動きながら両腕の銃で攻撃してきた。

「こいつー！」

レオンは背中のカannonを展開すると、襲撃者に向け放った。

襲撃者はそのまま攻撃を避けるも・・・

「ティファ!」

すると、ティファは一気に近付き、左腕のブレードを展開して、振り上げた。

「はあああっ!」

そしてブレードを振り下ろすも、襲撃者は右腕のクローでブレードを掴み止めた。

「!」

襲撃者はそのままティファの右腕も片方のクローで掴むと、そのまま横に広げていった。

「くっ・・・!」

ティファは痛みで顔が引きつる。

「ティファ!」

「・・・!」

すると、後ろではスナイパーライフルを構えたレオンがおり、そのままトリガーを引き、弾丸を放った。

ティファはとつさにそのまま腕を軸にして後ろに回転した。

その直後に襲撃者の胴体に弾丸が直撃した。

「はあああつ！」

ティファはそのままフェイクライドの右かかたにあるダガーで襲撃者にかかと落としのようにして切りつけた。

それによつて襲撃者は後ろに数歩下がり、ティファを離れた。

「くっ！・・・なんて硬さだ」

弾丸が直撃した箇所には傷が少し入る程度にしかなかった。

「かなりの強敵だな・・・」

「そのようね」

と、二人は身構えるも・・・

「
」

その襲撃者はそのまま後ろにジャンプして森の中に消えていった。

「逃げていく？」

レオンはライフルを構えた。

「もういいわ。どの道ここからじゃ当たらないわ」

「・・・・・・・・」

そして、レオンがライフルを下ろした・・・

「チエストオオオオっ!!」

「「!?!」」

すると、森の茂みから誰かが飛び出てきた。

「な、なんだ!?!」

レオンはとっさに回避した。

そのものは容赦なく襲い掛かってきた。

しかもその姿と言うのが・・・

「な、生身で!?!」

そのものはISを身に纏わず生身でレオンに襲い掛かってきていた。

両手で持っているのは長い刀身を持つ日本刀であった。

「はああああっ!」

しかも素早い動きでどんどんレオンを追い詰めていった。

「ちょ、ちよつと・・・ま、待ってくれよ!」

「問答無用!」

と、相手は聞く耳を持たなかった。

「一刀両断!」

そしてそのものはレオンのスナイパーライフルを切り裂いた。

「う、うそだろ!？」

レオンはとつさに後ろにバックステップして距離を取った。

「だから待ってくれよ!」

と、レオンは必死にそのものを止めた。

「・・・・・・・・」

そしてそのものはティファとレオンを見た。

「・・・・・・・・」

そしてそのものは手にしていた刀を背中に背負っている鞘に戻した。

「どうやら嘘はついてはいないようだな・・・」

「いやだから、最初っからそう言っているのに・・・」

レオンは少し呆れていた……

「先ほどは失礼した……。ここ最近襲撃者が多くてな、少し神経質になっていたんだ」

そうして、レオンとティファはそのもの……というより女性に連れられてとある村に入り、彼女の家に行った。

「そうだったのですか……」

と、レオンは出されたお茶を一口飲んだ。

その女性は白髪……。もとい白銀の色をした髪で、背中まで伸ばしているが根元で紐が何かで結んでいた。年はティファやレオンよりは年上と思われ、キリツとしており、瞳の色は黒曜石のように黒かった。左目には黒い眼帯をしており、その服装と言うのが……。剣道の白い道着を着て、紺色の股がついた袴を穿き、その上に剣道の防具をつけていたが、唯一両手に付ける籠手代わりに黒い指先が開いた皮手袋をつけて、頭には青い額当てが付けられており、そのほかの防具も青かった。

背中に背負っていた刀は隣にある刀掛けに置かれていた。

「申し送れましたな……。私の名前は『葛三原明日羽』と申します。

あなた方は？」

「私はティファ・ボーデヴィツヒ・・・」

「俺はレオン・エスグランドって言います・・・。そういえば葛三原さんは日本人なんですか？」

「明日羽でいいぞ。確かに私は純日本人だ」

「純日本人って・・・まあいいとして、どうしてこんな辺境に？」

「武者修行というやつです」

「武者修行？」

「ええ。私の家は代々武士の系統でしたから、代々こういう修行に出ているのです」

「それだったら、どうしてこの村に留まっているの」

「実は最近この辺りで行き倒れてしまって、この村人に救われてからは恩返しのために用心棒をやっているのです」

「はぁ・・・。しかし明日羽さんの髪ってどうして白いのですか？脱色でもしているのですか？」

「いや。これはご先祖からの遺伝と聞いています」

「う、ご先祖？」

「はい。遠いご先祖の一人は私のように白い髪だったそうです」

「はぁ……。結構遠い遺伝ですな……」

「そうですね」

「……。しかし、明日羽さんは凄いですね。生身でISと対等に戦えるのですから」

「これも、修練の結果ですか」

「修練でISと戦うって……」

「まあ、そこまで活用できることはあまりないのですが、持つておくに役に立つ時があるんです」

「役に立つねえ……」

「そういえば、明日羽さんが使うその刀って、ISの武器ですか？」

「おや？人目でそう分かるのですか？」

「いや、俺のISのスナイパーライフルを切り裂いたからです。あれはISの武器でも中々壊れないものなんです」

「そうですか……。それは申し訳ございませんでした」

「まあ、修理はできるからいいですけど……。その刀は凄いですね」

「ええ……。亡き師匠が遺してくれた刀ですから」

「師匠？」

「・・・話は変わりますが、私は六年前に両親を目の前で殺されました」

「・・・」

「両親を失った私を引き取ってくれたのが、父の知り合いであった師匠でした」

「どんな人だったのですか？」

「・・・優しい・・・というわけではありませんでしたが、独りぼっちになった私を大切に育ててくれて、その間に武道を習ったりしました」

「・・・そうなんですか」

「でも、その師匠も・・・二年前に病死しました・・・」

「・・・」

「師匠は死ぬ直前に、私にあの刀・・・『獅子王剣・真』ししおうけん まことを遺したのです・・・」

「・・・そうだったのですか・・・」

「・・・私は武者修行の旅と、言っていますが・・・本当のところは両親の仇を取りたいのです」

「両親の・・・仇」

「忘れもしない・・・両親を殺した・・・鋼鉄の孤狼を・・・」
ペーオウルフ

「鋼鉄の孤狼・・・」
ペーオウルフ

すると、ティファは何かを考えた。

「・・・ティファ殿？何か心当たりがあるのですか？」

「いや・・・なんでもない」

「そうですか・・・」

明日羽は少しガツカリとした感じであった。

ドオオンッ・・・！

「！？」

すると、外から爆発音がして、三人はとっさに外に出た。

「あれは・・・」

外に出ると、村を何者かが襲っていた。

それは先ほどの襲撃者・・・『インビット P^{プロト}』であった。

しかもさっきより二体増えて、計三体いた。

「あいつ・・・仲間を連れて戻ってきやがった！」

「全く・・・しつこいやつね・・・」

「・・・」

「明日羽さん、下がってください！」

「し、しかし・・・」

「ISにはISで対抗します！行くぞティファ！」

「言われなくても」

と、ティファとレオンは走り出すと、そのままISを展開してインビットに向かって行った。

「くっ・・・まだ『あれ』を起動することができない・・・しかし

」

明日羽は背中に背負っている獅子王剣・真を見る。

「黙って・・・見るわけには行きません」

明日羽は刀の柄を持ったままインビットに向かって行った・・・

「トンファーセット！」

レオンは両手に刃が付いたトンファーを展開して、インビットに向かっていく。

「オラオラオラオラ！」

そしてインビットに殴りつけていくが、インビットの硬い装甲でダメージは薄かった。

「くそっ！かてえ！」

「レオ、伏せて！」

すると、レオンの後ろでは『四連ランチャー』を肩に担いだティファの姿があった。

そしてティファはミサイルを一斉発射した。

「うわっ、あぶねっ！」

レオンはとっさに横に避けると、ミサイルはインビットに直撃して爆発した。

しかし、煙が晴れると、インビットにはダメージは薄いようだった。

「ちっ！無駄に硬い・・・」

ティファは四連ランチャーを収納すると、背中のキャノンを展開してインビットに向け放った。

しかしインビットは素早く避けていき、隣ではもう二体のインビットとレオンが交戦していた。

「くそっ！どうすれば・・・」

「・・・・・・・・」

すると、ティファはサブマシンガンを展開して、インビットに攻撃しながら観察した。

（・・・もしかすると・・・）

ティファは何かに気付いたようだ。

そして両腕のブレードを展開してインビットに切りかかる。

しかしインビットは両腕のクローでティファの腕を掴み取った。

「どうやら・・・あなたには学習能力は無いようね・・・」

と、ティファは不敵の笑みを浮かべた。

そして背中のキャノンを両肩のカメラに向け放ち、カメラを破壊した。

すると、インビットはエラー音を出して、千鳥足になった。

「やはり・・・目をやられたら抵抗力が無くなるか」

そしてティファはインビットを蹴り、突き放した。

「レオ、こいつらの両肩のカメラを狙って！それがこいつらの弱点よ！」

「分かった！」

レオンは右手にエネルギーを集中させた。

「いくぜっ！ビームナツコッ！」

と、右拳を突き出すもインビットはジャンプして避けた。

「それを待っていたぜ！」

と、レオンは背中のカannonを真上に向けた。

「ツインビームカannon・・・メガショットッ！」

そしてカannonから高出力のビームを発射して、ビームはインビットに直撃してバランスを崩し落ちていく。

「どりゃあっ！」

レオンはその場を蹴り、両手に大型ハンドガンを展開して、至近距離でインビットの両肩のカメラに向け発砲した。

それによって二体目も千鳥足になって動きが鈍った。

「よしっ！最後の一体だ！」

と、レオンとティファは最後の一体に向き直る。

「
」

すると、インビットは両腕のハンドガンで二人に向け攻撃してきた。

「くっ！」

二人はインビットからの攻撃を避けていると……

「はああああっ！」

すると、インビットの右側から明日羽が飛び出てきた。

「明日羽さん！？」

インビットは気付くと、明日羽に向け発砲してきた。

「ふんっ！」

すると、明日羽は獅子王剣・真で弾丸を切り払っていった。

「す、すげえ……」

レオンは啞然とした。

そして素早いフットワークでインビットの攻撃を避けていった。

「はあああつ！」

そして近くまで来ると刀を振り上げて、インビットの右腕を切断し、そのまま両肩のカメラを切り落とした。

「チエストオオオツッ！」

そしてそのまま縦に振り下ろして、インビットを真っ二つにした。

「我が獅子王剣に・・・断てないものはない・・・」

明日羽が刀を鞘に戻すと、後ろでインビットが爆発した。

「す、すげえ・・・」

「・・・そう・・・わね」

二人は呆然として明日羽を見ていた・・・

「これでよし、と」

レオンは地面でじたばたしていた二体のインビットの動力ケーブルをブレードで切断して、インビットを機能停止にさせた。

「ふう・・・」

そうしてレオンはISを解除して、同時にティファもISを解除した。

「しかし・・・明日羽さんって・・・物凄いですね・・・」

と、レオンは隣で獅子王剣・真の刀身を確認する明日羽に聞いた。

「あれくらい造作もないことです・・・。それに明日羽さんっていうのは固いですね・・・。普通に呼び捨てでいいですよ」

「呼び捨てって・・・年上の人を呼び捨てにするのはちょっと・・・」

「・・・やはり年上に見えますか？」

「へ？」

「私は十六なんですけど・・・」

「・・・じゅ、十六？」

レオンは目をぱちくりとした。

「俺たちと同じ年だったのですか？」

「と、いうと、レオン殿とティファ殿は十六なのですか？」

「まあ、そうだけど」

「そうね」

「そうだったのですか・・・」

と、何か共感したようだった。

「しかし、ティファ殿とレオン殿はこれからどうするのですか？」

「俺たちは今後旅をするんです・・・あの時はジープの冷却中だったんだ」

「ああ・・・だからあの森にいたのですね・・・」

「まあ、そうなんですよ」

「そうね・・・どこかの馬鹿のせいだね・・・」

「うつ・・・まだ根に持っていたのかよ・・・」

「フフフ・・・楽しそうですね」

「いや・・・楽しそうって・・・」

そうして少し賑やかになった・・・

「なんだか・・別れはつらいですね」

そうしてティファとレオンは出発をしようとして、明日羽はその見送りに来ていた。

「一緒に・・来れないんですか？」

「申し訳ございません・・。まだ恩を返しきれっていないので・・」

「そうですか・・」

そして、レオンはしばらく考えて・・

「なあ、明日羽」

「なんででしょうか？」

「・・いつかまた・・道が重なることって・・あるのかな・・」

「・・そうですね・・。いつかまた・・重なる時が来ますよ」

「・・そう」

と、珍しくティファが話しに入ってきた。

「じゃあな・・・明日羽」

「さようなら・・。また・・どこかでお会いしましょう」

そうして、レオンはジープを走らせて行った・・・

「・・・近い日に・・・また会いましょう・・・ティファ殿・・・レオン殿」

明日羽はジープが見えなくなるまで見つめた・・・

Story 8 仲間

「うーん……。そろそろ次の町に着くはず何だけどな……」

と、レオンは運転しながらGPSを見る。

「はぁ……。やっぱり任せるんじゃないかった……」

と、ティファは手を額に当ててため息をつく。

レオンは相当な方向音痴である……。つまりは道に迷っていた……

「レオに任せた私が馬鹿だった……」

「おいおい……。ひでえこと言っているぞ……」

「誰のせいだと思っているの」

と、ギロリとレオンを睨む。

「うつ……。とりあえず……前に進むしかないな」

レオンはとりあえず当てのない道を進んでいくのだった……

「はぁ・・・どこだここ・・・」

「あんたが言うな・・・」

と、二人は完全に道に迷っていた・・・

荒野のど真ん中・・・辺り一面土とちょっとだけ生えている雑草のみ・・・

「そもそもGPSがあるのになんで迷うのよ」

「俺にもわかんね・・・」

「・・・呆れる・・・」

「はぁ・・・。。・・・ん？」

辺りを見回していたレオンはとあるものを見つける。

「なんだ・・・あれ？」

「・・・？」

ティファもその方向を見た。

ぼやけているが、地面に穴が開いているように見えた。

「行ってみるか」

「なんでそうなるの」

と、ため息をつくもレオンはその場所にジープを走らせた……

しばらく走って……

「これは……」

レオンは近くにジープを止めた。

そこには、とてつもなく大きなクレーターがあった。

「何て大きさだ……。推測でも半径は十キロ近いぞ……」

「いや……それ以上ね」

そうして二人はジープから降りて巨大クレーターを見る。

「すげえ……。隕石でもこんなに大きなクレーターはできないぜ・

「・」

「確かにそうね……。でも隕石だったらクレーターの周りに山み
たいのができるはず……」

「そういえば……。そうだよな……」

「……。まるで何かが爆発して……。えぐられたって感じね……」

「……。確かに……」

と、レオンがあごに手を当てて考えていると……

「……………」

すると、ティファに異変が起きた。

「ティファ？」

レオンが見ると、ティファはふらついていた。

「どうしたんだ」

「……………」

そしてティファは後ろに倒れた。

「ティファ！」

レオンはとっさに動いて、ティファを受け止める。

「ティファ・・・どうしたんだよ！？おい！」

と、レオンは揺さぶるも、ティファは気を失っていた。

「いきなりどうしたんだよ・・・。と、とりあえずここから離れよう・・・」

レオンはティファを抱えてジープに乗り込んで、そのまま走らせた・・・。

そしてクレーターの中央には・・・白い光が鈍く輝いていた・・・。

「・・・大丈夫かな・・・」

と、あのクレーターから結構離れた場所で、レオンはジープの端にシートの端をつけて反対側に棒をつけて簡易型のテントを作り、その中にシートを敷いてティファを寝せていた。

「さっきより落ち着いた感じだけど・・・まだ油断はできないな」

そしてレオンは冷水をつけたふきんをティファの額に畳んで乗せた。

「もう夜か……。とりあえず火を起こしておくか……」

と、レオンは外に出て焚き火の準備をした……

「……………」

しばらくしてティファは目を覚ました。

「ここは……」

そして半身を起こすと、額に置かれていたふきんが落ちる。

「……………」

横を見ると、レオンが焚き火を起こして魚を焼いていた。

「おっ……。ようやく目が覚めたかティファ」

「レオ……………」

「全く、驚いたぜ。いきなり倒れるんだから、心配したぜ」

「……………」

「え？」

レオンは意外なことにちよつと驚く。

それは、ティファが素直に謝ったことである。

「意外だな・・・。お前が素直に謝るなんて」

「・・・何か悪いの」

「い、いや。珍しいって思ったから」

「・・・そう」

と、いつも通りになった・・・

「それにしても、一体何があつたんだよ」

「・・・・・・」

ティファは黙る。

「・・・なあ・・・一体何があつたんだよ」

「・・・あなたには・・・関係ない」

「な、なんでだよ」

「別に・・・あなたが知らなくても私は困らない」

「・・・俺は困る」

「・・・・・・」

「ティファがこんな状態で俺は何も知らないから何も出来ないなんて・・・・俺は嫌だ」

「・・・・あなたに・・・・何が分かるの」

「分かるさ・・・・。人の気持ちぐらい分かるうとするさ。それが仲間つてもんだろ」

「・・・・仲間」

「何だつて相談が大切だろ？仲間には助け合いが必要さ」

「・・・・・・」

「それが・・・・あの『レジェンド』が言っていたことだよ」

「レジェンドが？」

「ああ。レジェンドは何より仲間を大切にしていたんだ・・・・。だからあんなに強かったんだよ」

「・・・・そう・・・・」

「俺もそれに習って仲間を大切にしようと思っているんだ」

「・・・・・・」

「いくらティファが俺にそういう態度を取ったって、俺はティファを大切な仲間って思っているさ」

「・・・・・・・・」

すると、ティファの頬が若干赤らむ。

「・・・・？どうしたんだ？」

「なんでもない」

「そうか……。なら飯は食えるか？さっき近くにあった川で獲った魚だけど、一応食えるぜ」

「・・・・一応ねえ・・・・」

と、ティファは立ち上がるとレオンの横に座って串に刺さった魚を手取る。

「・・・・・・・・」

じろじろと見てからティファは一口頬張る。

「・・・・おいしい」

「だろ？食える時に食ったら、困らないぜ」

と、レオンも魚が刺さった串を取り、食べていく。

「・・・・・・・・」

ティファはチラッとレオンを見て、再び魚を食べる。

「はぁ・・・食った食った・・・」

と、レオンは腹をさすって後ろに手をついた。

「・・・・・・・・」

「さてと・・・そろそろ寝るか」

「そうね」

と、レオンはテントの下に毛布を敷く。

「おお・・・結構ぬくいな」

と、レオンは寝ると、毛布を掛けた。

「・・・・・・・・」

すると、ティファはしばらくすると・・・

「・・・・・・・・!?!?」

そしてティファはレオンの横に寝ようとする。

「て、ティファ？」

レオンは半分混乱していた。

「今日だけは・・・一緒に寝かせて」

「な、なんで・・・？」

「・・・理由は無いわ・・・。ただ・・・なんとなく」

「・・・別に・・・いいけど・・・」

「・・・そう」

そうしてティファはレオンの隣に寝た・・・

「・・・」

レオンは落ち着かなかった。

（ど、どうしたんだよ・・・ティファのやつ・・・）

ティファは静かに寝息を立てて寝ていた。

(うう・・・お、落ち着くんだ・・・落ちつ・・・)

すると、寝ているものもティファがレオンに抱きついてきた。

(!?!?!?)

その直後レオンの心臓は物凄く飛び跳ねた。

(なななな・・・)

物凄く混乱して頭の中は真っ白だった。

その間にレオンの背中にはティファの少し豊満な胸が密着していた。

(・・・今夜・・・ね、寝れるかな・・・)

と思つても、別の考えがよぎる。

(・・・明日無事に起きればいいけど・・・)

ティファ脳ではレオンの首に少し当たっており、いつ首を絞められそうか心配だった。

(・・・・・・)

しかし、実はティファは起きていた。

（・・・仲間を大切に・・・か）

そうしてティファはレオンに抱きついた。

（・・・あの人も・・・博士も・・・そう言っていた・・・）

ティファは額をレオンの背中に当てた。

（・・・レオ・・・。あなたが私を守るのなら・・・。私も・・・守る）

そうして眠りについた・・・

次の日の朝・・・レオンはと言うと・・・

「大丈夫？」

「・・・なわけないだろ・・・」

レオンは結局一睡もできず、目の下にはくまができて、物凄く眠そうだった・・・

「・・・レオはまだ寝てていいわ・・・。私は少し外に出てる」

「ああ・・・。そうする・・・」

と、気を失ったかのようにしてレオンはぱたりと倒れて眠った・・・

「・・・少し・・・やりすぎたかしら・・・」

ティファはレオンを一瞥して、テントの外に出た・・・

朝日が差して、ティファは腕で目を庇う。

「・・・これで・・・いつかは会えますか・・・博士」

ティファは届くとは思わないが、どこかにいるロイに声をかけた・・・

・

S t o r y 8 仲間（後書き）

どうも最近感想が少ないような気がします・・・。

Story 9 悪夢のイリュージョン

「とりあえずここで休憩するか」

と、レオンは湖の近くにジープを止めた。

「こいつの点検をしておくか……。ティファはその間に水を汲んでくれるか？」

「仕方がないわね」

と、二人はジープから降りると、レオンは道具を手にしてジープのボンネットを開けて、ティファは荷台に乗せてあるポリタンクを持って湖に向かう。

「これでよし、と」

しばらく点検をしてレオンはボンネットを閉じた。

「……それにしても……。ティファのやつ遅いな」

水を汲むだけならすぐに終えるはずだが、まだ帰ってこない。

「・・・・・・・・」

レオンはティファが行ったほうへいこうとすると・・・

ドオンッ・・・・・・・・！

「！？」

すると、湖から爆発音がした。

「ティファ・・・」

レオンはすぐに湖に向かって行った・・・

少し前・・・

ティファは湖の水をポリタンクに入れていた。

「・・・・・・・・」

すると、ティファは辺りを見回し始めた。

「さっきからこっそりと見てないで、出てきたらどうなの」

と、ティファはとっさに立ち上がると、後ろの木に向かって言う。

「・・・ふーん・・・。前よりかはよくなったわね・・・」

すると、木の陰から一人の女性が出てきた。

金髪のショートヘアをして、瞳の色は黒で、背丈はティファと同じくらいだった。

「何者だ」

「・・・やれやれ・・・。あの施設から追放されてから・・・もう忘れたの・・・ティファ」

「・・・なぜ私の名前を」

「そりゃ知っているわよ・・・。施設には一緒にいたからね」

「・・・なに・・・？」

「・・・忘れたの？・・・この私・・・『ミーナ・ランスター』を」

「・・・ミーナだと・・・？」

「思い出したようね・・・。久しぶり、ティファ」

「くっ・・・。お前にそんなことを言われる筋合いはない」

「・・・ふーん・・・。しばらく見ていないうちに・・・結構変わったわね。施設にいた頃のあなたはそんなに強気じゃなかったのに」

「・・・・・・」

「まあ、悪くはないわね」

「・・・そんなことより・・・。お前がなぜここに・・・」

「・・・決まっているでしょ・・・。あなたのISを奪いに来たの」

「なっ!?!」

すると、ミーナは左腕にISアーマーを展開して、手にしていたライフルでティファに向け放った。

「くっ!」

ティファはとつさに横に避けると、ISを展開した。

「そこなくちゃ」

すると、ミーナも完全にISを展開した。

そのISは結構異彩を放っていた。

全体的に形状は細く、従来のISよりも軽量化されていた。カラーリングは黒をメインに黄色や白があり、頭のデバイスは飾りがついた冠のようなものであり、背中には先端が二つあるマントがついていた。手には結構大きなメイス『ナイトメアズソウル』を持っていた。

道化師をイメージさせるIS・・・『ナイトメア』である。

「くっ・・・貴様もISを・・・」

「ISを奪うのに、ISを使わないでどうやって奪うって言うのよ」と、ミーナは手にするメイスでティファに攻撃してきた。

「くっ!」

ティファは回避しながら右手に『アサルトブレード』を展開した。

「はあああああっ!」

そしてティファはアサルトブレードを振り下ろした。

「なっ!?!」

しかし攻撃は直撃したかと思われたが、同時にナイトメアが消えた。

「残像!?!」

「遅い」

そしてミーナはティファの背後から攻撃してきた。

「ぐあっ!」

ティファは体勢を崩しそうになるも、何とか保った。

「くっ・・・っのっ!」

ティファはそのままアサルトブレードを横に振るつも、残像を切っ

ただけだった。

「それで切ったつもり？」

そしてミーナはまたティファの背後から攻撃した。

「ぐっ・・・！」

そしてティファはそのまま前に飛ばされながら倒れた。

「ナイトメア・・・その名の通り・・・悪夢を見せてあげる」

そして倒れたままのティファにミーナが向かっていく・・・

「ビームナックコッ！」

すると、木々からISを身に纏ったレオンが飛び出し、ミーナに向けてビームナックルを向けた。

「！？」

ミーナはとつさにメイスを前に出して、ビームナックルを防いだ。

「くっ！」

レオンはそのまま後ろに下がり、ティファの元に向かう。

「大丈夫かティファ」

「え、ええ……。なんとか」

ティファは何とか立ち上がった。

「馬鹿な……。ISを操れる男がまだいたの・・」

ミーナはレオンがISを操っていることに驚いていた。

「てめえ……。これ以上好き勝手にさせないぞ！」

と、レオンは背中のカannonを展開して、ミーナに向けて放つ。

「ふっ」

しかしエネルギー弾はナイトメアの残像を撃ち抜いただけで、残像はそのまま消えた。

「なっ、なに！？」

「左からくるわレオ！」

「くっ！」

レオンはとっさに左のほうを向いて、左肩のシールドを前に出した。

すると、ナイトメアのメイスがシールドに直撃する。

「ちっ……」

ミーナは舌打ちをすると、そのまま後ろに下がる。

「お前は一体何者だ！」

レオンはミーナに向け叫んだ。

「私？・・・悪の秘密結社・・・『ファントムタスク亡国機業』・・・その一員よ」

「あ、悪の秘密結社だ！？」

「馬鹿馬鹿しいでしょうが、その歴史は古い組織よ」

「くっ・・・」

そしてナイトメアが迫ってくる。

レオンとティファはキャノンを展開して応戦するも、ミーナは残像で避けていき、攻撃を仕掛けてきた。

「ティファ・・・ここじゃ動きにくい・・・一旦森から出るぞ」

「わかった」

そしてティファとレオンはそのまま後ろに下がって、森を出た・・・

「馬鹿め・・・このナイトメアの真の恐ろしさを自分から味わいにいくなんて・・・」

ミーナの口元が釣り上がる・・・

そして二人は森から出て広場に出た。

「ティファ……。なんとか相手の動きを鈍らせないと」

「分かっている……。でも残像ができるほどの速さの相手にどう動けば……」

「なら……。俺に考えが」

すると、レオンが横から攻撃を受けて吹き飛ばされた。

「ぐっ!?!」

「レオ!」

するとティファの横からナイトメアが迫ってきた。

「くっ!」

ティファはとつさに左腕のブレードを展開して、ナイトメアに切りかかる。

しかし、ナイトメアは切られると同時に消えた。

「……!」

そして背後から攻撃を受けた。

「このっ！」

吹き飛ばされたレオンは立ち上がると同時に背中のキャノンを放つ。
しかしそれは残像を撃ち抜いただけだった。

「ふん・・・」

そしてミーナはレオンの右側からメイスを叩きつけた。

それによってレオンは地面に倒れた。

「・・・このナイトメアに広い場所で戦うなんて・・・笑止千万」

すると、ナイトメアが三体に分身した。

「なっ!？」

ティファが驚いているうちにミーナはティファに襲い掛かってきた。

「悪夢を見せてあげて・・・ナイトメア」

そして三体がかりでティファに襲い掛かった。

「ぐっ！」

分身下三体のナイトメアにティファはなす術がなかった。

そしてナイトメア三体同時の攻撃で、ティファは上空に舞い上げら

れた。

「ぐはっ！」

その衝撃でティファの息が詰まる。

「吹き飛べ」

ミーナは素早くティファの横に行くと、横腹にメイスを叩きつける。

「ぐっ・・・！」

「泣き叫べ」

飛ばされるティファの前に素早く行き、メイスで上に叩き上げる。

「ぐはっ!？」

「砕け散れ」

そしてミーナは上空に上がり、ティファにメイスを力強く腹に叩きつけた。

「がはっ!？」

そしてそのままティファは地面に強く叩きつけられた。

「必殺ファンクション」

『アタックファンクション・・・デスサイズハリケーン』

すると、ナイトメアはその場で回転し始めて、メイスの先端に黒いエネルギーを溜めた。

そして力を溜めて、メイスを振るうと、先端に溜めた黒いエネルギーをティファに向け放った。

そして黒いエネルギーはティファの近くに落ちると、そのままエネルギーが膨れだし、ハリケーンの如くティファに襲い掛かった・・・

「ぐ・・・くう・・・」

体中から痛みが遅い、ティファは動けなかった・・・。

フェイクライドはかなりの損傷を受けていた。

「さてと・・・もう抵抗はできないわね」

と、ティファの近くにミーナが下り立った。

「これの出番ね」

すると、ミーナは左手にとある機械を取り出して、それを展開すると四つの足が出てきた。

「な、何を・・・する気だ・・・」

その間にもミーナはその機械をフェイクライドの胴体に設置した。

「じじいじとよ」

すると、ナイトメアの指で鳴らした。

「・・・ぐっ!?!・・・ぐああああっ!」

その瞬間、ティファの身体に電気に似たエネルギーが流れて、激痛が走る。

「さて・・・これで終わり」

しばらくしてミーナはその機械をティファから外した。

「く、くう・・・。そんなもので・・・私を止められると・・・」

と、立ち上がるようにするが・・・

「ふん・・・。丸裸のあなたに何ができるって言うの」

「・・・なに・・・!?!」

そして、ティファは違和感に気付いた。

ティファの身体には、フェイクライドがなかった・・・。

残っているのは服を量子変換されて着ているISスーツのみだった。

「ISがない!?!」

ティファが混乱していると・・・

「あなたの探し物はこれかしら？」

すると、ミーナの左手には、光り輝くISのコアがあった。

「フェイクライド！？一体どうやって！？」

「『^{リムーバー}剥離剤』・・・ISを操縦者から強制的に引き剥がす秘密兵器よ・・・見れてよかったわね」

「くっ！・・・それを返せっ！」

と、ティファはミーナに向かっていく。

「馬鹿め・・・」

ミーナはティファを足で蹴り飛ばした。

「ぐっ！？」

そのまま後ろに飛ばされて地面に叩きつけられた。

「ISのないあなたに何ができるの・・・」

「くう・・・」

ティファは奥歯を噛み締める。

「これは貰っていくわよ・・・ロイ・ラングレン博士のISをね」

「なっ！？博士を知っていると言うのか！」

「当然よ・・・亡国機業は博士の持つ技術を欲しているもの・・・
今も博士の行方を追っているわ」

「お前たちなんか博士が捕まるものか！」

「・・・ふーん・・・今思えば落ちこぼれたったあなたには、博士
のISは勿体ないわね」

「くっ・・・」

「それに、そんなやつなんか思ったって、何かあるのかねえ」

「・・・っ！博士を侮辱するなあっ！」

と、ティファは怒りを露にしてミーナに向かっていく。

「・・・しっこい」

そしてミーナはメイスを振り上げた。

「このおおおっ！」

するとミーナの左側からレオンが突っ込んできた。

「！？」

ミーナはとつさに回避できず、レオンの突進を受けた。

「ティファに手は・・・出させねえ！」

そしてレオンはナイトメアの両腕を掴んだ。

「！？・・・な、何を・・・」

「この距離なら・・・こいつは避けられまい！」

すると、背中のキャノンを展開してミーナに向けた。

「・・・！？あなたも・・・ただじゃすまないわよ」

「そのつもりさ！」

そしてキャノンのエネルギーを充填した。

「くらえっ！・・・メガショット！」

そして至近距離でキャノンを放つと同時にレオンはナイトメアの腕を離れた。

「！？？」

そしてエネルギー弾はナイトメアに直撃して、爆発した。

「ぐっ！」

しかしその爆発でレオンは少し吹き飛ばされる。

「・・・っ!？」

すると、背後から攻撃を受けた。

そこには、さっきまでレオンの前にいたはずのミーナだった。

「残念だったわね・・・結構いい作戦だったのに」

「ば、馬鹿な・・・。なんで・・・」

「・・・確かに・・・攻撃が当たる直前までは本物よ・・・でも、手を離したのは・・・大きなミスだったわね」

「・・・くっ・・・」

「当たったのはナイトメアの残像よ・・・でも、さすがに私も冷や汗かいたわ。本当にギリギリのタイミングだったし」

見ればナイトメアの半身が若干こげていた。

「・・・・・・」

レオンはティファを守るようにして前に出る。

（・・・どうする・・・。渾身の一撃を放った後じゃ・・・ヴァイスハイトのエネルギーは・・・。でも後ビームナックルを放てるかどうか・・・。でも当たらないと意味がない・・・どうする）

レオンは構えた。

「さて……。ついでだし、あなたのISもいたたくとしようかな」

そして肩に担いでいたメイスを構える。

「くっ・・・」

「チェストオオオオツッ！」

「「「!?!?!」」」

すると、どこかで聞き覚えがある叫びがして、森から誰かが飛び出してきた。

そしてその者は手にしていた刀を振り下ろした。

「ちっ！」

ミーナはとっさに避けるが、振り下ろされた刀身はナイトメアのマントを切り裂いた。

そしてその者は地面に着地すると、白銀の髪が宙を舞う。

「何者だ」

その者はゆっくりと振り向く。

「その二人は私の恩人……。死なせるわけにはいかない」

そして手にしている『獅子王剣・真』をミーナに向け構えた。

「我が名は葛三原・明日羽……。我は……。悪を立つ剣なり！」

と、その者……。明日羽は前口上を高らかに言った。

「あ、明日羽!？」

レオンは意外な人物の登場に驚いていた。

「お久しぶりです……。レオン殿……。ティファ殿」

と、明日羽はレオンとティファに向く。

「な、なんで明日羽が!？」

「話は後です」

と、明日羽はミーナに向き直る。

「ふーん……。助っ人の登場ってやつ?……。でも、生身に人間に何が……」

「ふつ……。いつ私が生身の人間だと言いましたか？」

「なに?」

すると、明日羽は左腕を上げると、手首には青と黒の腕輪があった。

「ま、まさか・・・それは・・・」

「今こそ発動の時・・・師匠の魂を受け継いだIS・・・『かみかぜ神風』」
「！」

すると、明日羽を光が包み込んだ。

「くっ・・・。まさか・・・ISを持っているやつがまだいたなんてね」

そして光が晴れると、明日羽はISを身に纏っていた。

全体の形状は『打鉄』に酷似していたが、ほとんどの箇所が全く異なるパーツになっていた。両肩の浮遊ユニットは通常より大型化されており、鎧武者の肩の鎧を模しており、足の脛まで伸びるサイドアーマーの変更はないが、六本の刀が表面にマウントされていた。頭のデバイスは三日月を模した角飾りで、全体のカラーリングは黒だが、各所に青が施されていた。背中には獅子王剣・真の鞘が背負われており、右手に刀を持っていた。

明日羽の師匠の魂を受け継いだIS・・・『神風』・・・

「あ、明日羽も・・・ISを持っていたのか」

「ええ。話は後です」

そして明日羽は獅子王剣・真を構えて、ミーナに向かっていく。

「中々珍しいISを持っているようだけど・・・。このナイトメア

に勝てると思っているの」

すると、ナイトメアは三体に分身して、明日羽に向かって行った。

「分身か……。だが、実体は一つ……」

明日羽の周りを回るナイトメアに、明日羽は目と閉じて、耳を研ぎ澄ました。

「戦闘中に目を閉じるなんて……。とんだ馬鹿ね」

そしてナイトメア三体は明日羽に襲い掛かった……

「……。見切った！」

すると、明日羽は目を開けて、明日羽の前から襲ってくるナイトメアに切りかかった。

そして刀はナイトメアに直撃した。

「な、なにっ!?!」

ミーナは見破られたことに驚いていた。

「ば、馬鹿な……。ナイトメアのイリュージョンを見破れるわけが……。ない」

「愚かなのは貴官のほうだ」

「!?!」

「三体に見えても・・・実体は一つだけだ・・・。同じように動いて見えても、動きを集中してみれば先導して一機が先に飛び出していることが分かる・・・。それが実体だ」

「ま、まさか・・・こんな短時間でナイトメアの動きを見切ったって言うの・・・。ありえない！」

ミーナは明らかに動揺していた。

「この世に完全無欠な物などない・・・。必ず欠点がある！」

そして明日羽は『瞬間加速』を掛けて、ミーナに向かっていき、獅子王剣・真を振り上げる。

「獅子王剣・・・一閃切り！」

そして刀身は振り下ろして、ナイトメアに斬りつけた。

「ぐっ!？」

ただでさえ軽量化されているナイトメアは大ダメージを受けて、後ろに飛ばされるも、ミーナは何とか体勢を保った。

「くっ・・・。ただの斬撃でここまでのダメージだと!？・・・ただのISでないな」

「言ったはずだ・・・。この神風は師匠の魂を受け継いだ、と」

「馬鹿馬鹿しい・・・。そんなことなどありえない!」

「・・・それを信じるかは人それぞれだ・・・。だが・・・私の役目は果たした」

「な、なに・・・？」

そしてミーナははっとした。

左手にはフェイクライドのコアが無くなっていた。

「ま、まさか！？」

ミーナはとっさに明日羽を見ると、明日羽の左手には、フェイクライドのコアがあった。

「それを奪い返すために・・・あの攻撃を」

「そうだ・・・。ティファ殿の大切なものを奪われたままにはしない」

（・・・もしあいつがコアを奪還することを優先じゃなかったら・・・私はもう倒されていた！？）

ミーナはぞっとした。

そして、明日羽はティファのほうを向いた。

「ティファ殿！」

そしてフェイクライドのコアをティファに投げ渡す。

「あっ・・・」

ティファはそのコアをキャッチした。

「・・・来い・・・フェイクライド!」

ティファが名前を叫ぶと、コアが輝きだし、ティファはISを身に纏った。

「よかったな・・・ティファ」

「レオ・・・」

そしてティファとレオンは明日羽の隣に立つ。

「さてと・・・。まだやるのか」

と、明日羽は刀の剣先をミーナに向ける。

（・・・さすがに三対一じゃ分が悪すぎるか・・・。それにナイトメアもこれ以上のダメージを受けるわけにはいかないわ）

と、ミーナはメイスを肩に担ぐと・・・

「・・・今日は・・・退いてあげるわ」

と言うと、ミーナは後ろにジャンプすると、そのまま消えていった・・・

「あ、あいつ!」

と、レオンが追いかけてようとすると・・・

「レオ・・・追わなくてもいい」

「・・・だ、だけど」

「どの道追撃をするだけのエネルギーはないわ」

「・・・・・・・・」

明日羽の神風は大丈夫だろうが、ヴァイスハイトとフェイクライドはもうエネルギーが残ってはいない

「・・・わ、分かった・・・」

そうしてレオンは立ち止まった・・・

「しかし・・・。どうして明日羽がISを持っているんだ？」

少ししてレオン達はジープを置いている場所まで来た。

「このISが私の元に来たのは師匠が亡くなって数週間後のことでした・・・。その時にとある研究所から師匠からの遺産として、神風を渡されたのです」

「遺産？」

「ええ……。この神風には師匠のモーションパターンを取り込んでおり、それをサポートシステムに転用したプログラムが入っているのです」

「なるほど……。だから魂を受け継いだって言っているのか」

「ええ」

「……。それにしても、明日羽はなんで俺たちを追ってきたんだ？」

「……。あの後私は村人の恩を返して、それから二人を追う形で旅を再開して、こうして二人と再会しました」

「いや、俺が聞きたいのは……」

「理由は……。二人がよければですが……。この私を旅のお供にさせてください！」

と、明日羽は土下座して頼み込んだ。

「あ、ちょ、ちょっと、そんなにしなくても……。って、どうして俺たちと……」

「私はずっと、旅を共にする仲間が欲しかったのです」

「仲間？」

「ですが、私と共に旅ができるものは少なかった……。ですが、

レオン殿とティファ殿となら、どこまでもお供しましょう」

「・・・明日羽・・・」

そしてレオンはティファをチラツと見る。

するとティファはため息をついて・・・

「・・・別に構わないわ・・・。仲間が増えても」

「・・・分かった・・・。明日羽・・・俺たちと・・・一緒に来るか？」

「喜んで！我が剣術を役に立てれば本望です！・・・共に参りましょう」

と、明日羽は一気に立ち上がった。

「ああ。明日羽・・・お前は今日から俺たちの仲間だ」

「はい！」

（・・・仲間が増える、か・・・。でも、悪くない・・・）

そうして、新たに明日羽が仲間になった・・・

「くっ・・・やってくれるね・・・」

ミーナは木にもたれかかった。

「・・・」

そして、手からいきなり一枚のカードを出した。

「・・・『愚者』の逆位置・・・軽率・・・か」

カードにはそう記されていた。

「・・・侮っていたのは・・・私の方が・・・」

そうして、ミーナは歩きだした・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3273x/>

IS - インフィニット・ストラトス - 三種のISを操る者

アナザーエピソード

2011年10月30日14時17分発行